杏林大学

杏林大学 令和元年度 地域交流活動報告書

発 行 日　令和２年９月
編集発行　杏林大学　地域交流推進室
〒181-8612　東京都三鷹市下連雀５－４－７
TEL：0422－47－8052　FAX：0422－47－8054

http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/society/area2/

文部科学省 地(知)の拠点

2019
令和元年度

地域交流活動報告書

杏林大学

大学COC事業／COC＋事業による
全学的な地域志向化の定着から新たな取り組みへ

学長　大瀧　純一

本学が進めている地域交流活動は、医学部を母体とする総合大学としての特長を活かして、「健康･福祉」「にぎわい創出」「防災」「国際化」などさまざまな分野に渡っております。これらの遂行に関しては、地域交流委員会・地域交流課をはじめ教職員の多大な努力はもとより、何よりも地域の皆さまの教育・研究・社会貢献活動へのご理解とご協力が必要であります。常日頃から、協働していただいている地域関係者、特に大学COC事業／COC＋事業を通じてさまざまな連携活動に取り組んできた東京都三鷹市・八王子市・羽村市・岩手県の皆さまに、心よりお礼申し上げます。

大学COC事業の教育・研究・社会貢献活動の成果を生かしつつ、三菱地所レジデンス株式会社との産学連携による防災ツールの英語化や、保健学部の教育活動を軸にした東京都武蔵野市との包括連携協定締結など、井の頭キャンパスを中心とした新しい取り組みも始まっています。また、本学関係者対象の活動のみならず、公開講演会や「高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム」（文部科学省・職業実践力育成プログラム）の開講など、地域住民の方々を対象とした学びの場を提供する活動も引き続き実施しています。さらに、平成27年度からは『地（知）の拠点大学による地方創生推進事業』（COC＋事業）の参加大学として、岩手県内の活性化に主に教育面から取り組み、地域創生インターンシップへの参加や各学部の実習を展開しております。

本報告書は、本学の多様な地域交流活動について、令和元年度の全体像をお示しするものとなっております。できるだけ多くの方にご覧いただき、本学の地域交流活動をご理解いただくとともに、積極的なご意見をお寄せいただければ幸いです。

本学では、今後も地域との特色ある連携に力を入れて参りたいと考えております。

なにとぞ引き続きの活動にご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

社会的状況の変化に対応しつつ
地域交流活動のさらなる発展を目指す

地域交流推進室 室長　古本　泰之

本学では、全学的な『卒業認定･学位授与の方針』（ディプロマ･ポリシー）において、卒業時点までに獲得すべき能力のひとつとして、「高い倫理観と社会的責任能力」（高い倫理観を持ち、規則を遵守し、地域社会の持続的発展のために、社会的責任を積極的に果たすことができる。）を定めております。学生たちはこの能力を習得すべく、主にキャンパス周辺の地域で多様な活動を行っております。また、学生のみならず、教職員による研究・社会貢献活動も地域内で活発に展開されています。これらの活動の実施においては、地域社会の皆様方には多大なる御協力を頂いており、心よりお礼申し上げます。なお、令和２年１月には東京都武蔵野市と新たに包括的連携協定を締結し、今後は保健学部の取り組みを軸に連携を深めていく予定です。

さて、全学１年次必修科目『地域と大学』をはじめとする各学部教育の地域志向化、各種の社会貢献活動は大学COC事業の成果もあって定着してきております。ただ、地域社会における課題をテーマとした教育活動や、地域の活性化を支える「知的拠点」としての大学が社会において果たすべき役割は多様化しており、本学においても新たな地域交流のコンセプトを構想する時期に入ってきたと考えております。本学では学生の地域での活動に対するニーズも高いことから、引き続き地域内各団体との連携を深めつつ取り組みを進めて参ります。また現在、岩手県を舞台とする『地（知）の拠点大学による地方創生推進事業』（COC＋事業）に、参加大学として関わっております。この事業の最終年度である令和元年度においては、首都圏大学における教育の視点から地方創生への関わりを深めるべく、学生実習の実施や「ふるさといわて創造人材」の認定などを進めて参りましたが、この継続の在り方についても検討しております。

現在、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、地域交流活動も大きな変更を余儀なくされております。ただ、地域社会と大学との連携を止めるのではなく、感染症の沈静化を願いつつ、ICTの活用など、新たな視点からの活動を模索していく所存です。本報告書を御一読いただき、本学の活動に様々な形で御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

杏林大学 地域交流活動報告書　目次

杏林大学 地域交流活動報告書　発刊にあたって
大学COC事業／COC＋事業による
全学的な地域志向化の定着から新たな取り組みへ
学長　大瀧 純一　2

社会的状況の変化に対応しつつ
地域交流活動のさらなる発展を目指す
地域交流推進室　室長　古本 泰之　3

地域を志向した教育活動

①1年次必修科目「地域と大学」を開講
「地域における大学の役割」を学ぶ　5

②令和元年度「高齢社会における地域活性化
コーディネーター養成プログラム」開講　7

杏林CCRC指定研究活動

①健康寿命延伸
がん患者と地域社会のための加齢等に関する研究　8

②災害に備えるまちづくり
東日本大震災からの教訓と首都直下型地震への備え
米国ポートランドとの協業　10

③岩手県における地方創生
東日本大震災被災地域での復興期活動における
内部人材と外部人材との連携ネットワーク構築
プロセスに関する比較研究　12

地域における研究活動

①障がい者スポーツボッチャが地域高齢者の
身体面、心理・認知機能面へ与える影響　14

②特別な支援を必要とする子どもの
保育園生活における課題　16

③入院を契機にして変化する包括ケアに関する研究：
家族構成が地域包括ケアに及ぼす影響に関する研究　18

④三鷹市クラシックバレエ教室受講生の
障害予防について　20

⑤健康長寿を目指した声の加齢変化に対する
音声治療の長期治療効果の検証　21

⑥東日本大震災による避難者に対する
運動実施状況調査　22

地域における社会貢献活動

①撮って現像してアナログ白黒写真を作る　24

②JR東日本との協働による「学生が考えた
駅からハイキング」プログラムの企画・運営　25

③鎌倉浄智寺写真供養感謝祭の企画・運営　26

④精神に障害がある人の配偶者・パートナーへの支援　28

⑤多胎育児支援活動
「ツインズマーケット」の開催　29

⑥極低出生体重児　親の会「ぴあんず」　30

⑦「生涯スポーツの機会提供」プログラム　31

⑧性の多様性を取り入れた
「いのちのおはなし会」実践の試み　32

⑨災害に備えるまちづくり
BLS指導を通した実践的な災害対応力の向上　33

⑩発達障がいの子どもとその家族を
対象にした「きらめきハッピーキャンプ」　34

⑪自閉スペクトラム症を中心とする
障害児者が行うピアノ・電子オルガンの演奏会　35

⑫三鷹市における健幸教室および体力測定会の開催　36

⑬要介護高齢者への
「アクティビティ・トイ」を用いた活動支援　37

⑭大学と市民の協働による防災啓発活動
「みたか防災マルシェ」　38

⑮花でとりもつ地域の『輪（和）』　39

⑯地域活性化の理論と実践の「みたか知り隊ウォーク」　40

■「第 8 回杏林CCRCフォーラム 地域交流活動
抄録集」を作成　41
■その他の地域交流活動　41

地域との連携

活　動

①秋田県湯沢市・秋の宮温泉郷との
連携協定に基づく活動　43

②三鷹市・羽村市・八王子市・武蔵野市との連携　44

産学連携活動

①株式会社アトレとの活動を展開　48

②三菱地所レジデンス株式会社との連携　49

■令和元年度　杏林大学公開講演会・公開講座　50

COC+ 実績報告

「ふるさといわて創造プロジェクト」事業

①「ふるさと発見！大交流会 in IWATE 2019」に参加　52
②「ふるさといわて創造人材」に本学から 2 名認定　52
③「ジョブカフェいわて」インターンシップに参加　53
④保健学部理学療法学科が県内の施設を見学実習　53
⑤外国語学部が釜石市で観光関連実習を実施　53
⑥令和元年度 COC＋事業における取り組み　54
⑦令和元年度 杏林CCRC拠点推進委員会開催記録　55

地域を志向した
教育活動 ①

1 年次必修科目「地域と大学」を開講

「地域における大学の役割」を学ぶ

本学では医学部･保健学部･総合政策学部･外国語学部の 1 年生全員が受講する必修科目「地域と大学」を開講している。連携市である三鷹市・羽村市・八王子市の職員、連携大学教員を招聘し、それぞれの地域の課題を学ぶ。この授業は「全学部共通」で学ぶ他、「総合政策学部・外国語学部」「医学部」「保健学部」に分かれて行われた。

全学部共通、総合政策学部・外国語学部

地域に特化した内容である全学部共通授業は、4 学部混成のグループに分かれて受講し、後半は 2 学部ですすめた。グループワークを中心としたPBL形式の授業を通じて課題解決の手法の基礎を習得した。

授業回	日　程	学　部	形　式	内　　容
1	4 / 5 (金)	保健学部 総合政策学部 外国語学部	講　義	大瀧純一 学長 挨拶 「地域と大学における学び」　古本泰之 准教授 (外国語学部)
2	4 /12(金)	医学部 保健学部		「三鷹市の健康福祉施策について」 三鷹市：健康福祉部保健医療担当部長 小嶋義晃氏
		総合政策学部 外国語学部		先輩のガイダンス 総合政策学部：渡辺壮氏・高橋亜月氏・永田琴美氏・城下元志氏・佐藤未麻氏 外国語学部　：大原健楽氏・野呂京介氏・西澤陽奈子氏・秋間美央莉氏 鶴長美里氏
3	4 /19(金)	医学部 保健学部 総合政策学部 外国語学部	講　義 グループワーク	コンセンサスゲーム「雪山遭難サバイバル」 朝野聡 准教授（保健学部）
4	4 /26(金)			コンセンサスゲーム「東京の魅力について」 冨田泰彦 准教授（現教授）(医学部)
5	5 /10(金)			「ＫＪ法を体験しよう」 進邦徹夫 教授 (総合政策学部)
6	5 /17(金)	保健学部 総合政策学部 外国語学部	講　義	「防災ゲーム」　朝野聡 准教授 (保健学部) 「三鷹市の防災対策」 三鷹市：総務部危機管理担当部長 田中二郎氏
7	5 /24(金)		講　義 グループワーク	「防災・災害への対応：我々ができること」 朝野聡 准教授 (保健学部)
8	5 /31(金)		発表・講評	グループワーク　　発表・講評 三鷹市：総務部防災課 主査 朝倉雄平氏 総務部防災課 主査 山口雄大氏
9	6 / 7 (金)	総合政策学部 外国語学部	講　義	「八王子の学園都市づくり～学生の地域活動～」 八王子市：市民活動推進部学園都市文化課 主任 小山茂氏 「多文化共生とは」 八王子市：市民活動推進部多文化共生推進課 主査 櫻井哲希氏 市民活動推進部学園都市文化課 落合恵理佳氏
10	6 /14(金)		講　義 グループワーク	八王子市・グループワーク 八木橋宏勇 准教授 (外国語学部)
11	6 /21(金)		発表・講評	グループワーク　　発表・講評 八王子市：市民活動推進部学園都市文化課 主任 小山茂氏 市民活動推進部学園都市文化課 落合恵理佳氏
12	6 /28(金)		講　義	「オリンピック・パラリンピックのレガシー活用策を考える」 羽村市：企画総務部東京オリンピック・パラリンピック準備室 主査 須田誠氏 企画総務部企画政策課 主査 小泉恵美氏
13	7 / 5 (金)		講　義 グループワーク	羽村市・グループワーク 原田奈々子 教授 (総合政策学部)
14	7 /12(金)	総合政策学部 外国語学部	発表・講評	グループワーク　　発表・講評 羽村市：企画総務部東京オリンピック・パラリンピック準備室 主査 須田誠氏 企画総務部企画政策課 主査 小泉恵美氏
15	7 /19(金)		講　義	「地域と大学―地方創生への関わり―」 岩手大学：小野寺純治特任教授、船場ひさお客員教授、穴田光宏客員准教授

医学部

「地域と大学」（早期体験学習Ⅰ）は全学部共通授業、病院体験学習、地域体験学習、OSCE患者体験の４つの領域で構成されており、その中の地域体験学習は、医学・医療を学ぶ前提として、地域の方々との交流や活動をとおして学ぶ早期体験学習である。

授業回	日　程	形　式	内　　容
1	4 /12(金)	講　義	「日本の医療・福祉政策の過去、現状、未来」 吉田正雄 准教授
2	5 / 7 (火)		「地域体験学習　オリエンテーション」 江頭説子 講師
3	5 / 8 (水)		「フィールドワークの基礎」　苅田香苗 教授 「杏林大学医学部付属病院と周辺の医療・福祉施設との連携」 塩川芳昭 教授
4	5 /16(木)		「地域体験学習　事前学習」　江頭説子 講師
5 6 7 8 9 10	5 /31(金) 6 /14(金) 6 /21(金) 6 /28(金) 7 / 5 (金) 7 /12(金)	グループワーク アクティブ ラーニング	「地域体験学習」　江頭説子 講師、各担当教員
11	9 / 6 (金)	全体講義 グループワーク	前半：活動の振り返り 後半：課題の再設定、研究方法の検討 江頭説子 講師
12	9 /13(金)		分析、プレゼンテーションの説明 報告会へむけての諸注意等 江頭説子 講師
13 14	9 /27(金) 10/18(金)	グループワーク	グループ研究 「分析、報告会に向けての準備」 江頭説子 講師
15	11/ 1 (金)	講　義	地域体験学習報告会 江頭説子 講師、各担当教員

保健学部　看護学科

「福祉・地域と大学」は、全学部共通授業と学科独自に行う講義で構成されている。後半の授業では、生活に困難さを抱える人を地域でどのように支えたらよいのか、どのように関わるかを考え学んだ。

授業回	日　程	形　式	担当教員	内　　容
9	6 / 7(金)	講　義 グループワーク	柴田滋子 講師	イントロダクション 「社会福祉を学ぶ意義と各地域における社会問題」
10	6 /14(金)	講 義 授業内レポート		「少子高齢化」
11	6 /21(金)			「障害者の社会復帰」
12	6 /28(金)			「女性の社会進出と貧困」
13	7 / 5 (金)			「子どもの貧困」
14	7 /12(金)			「児童虐待と法制度」
15	7 /19(金)			「事例から学ぶ児童相談所や家庭支援センターなどの機能と役割」

※授業第１～８回目は他学部との合同授業（P５ 表参照）

地域を志向した
教育活動 ②

令和元年度「高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム」開講

開講式

４月３日（水）、14名の受講生を迎えて開講式が行われた。

本講座は、文部科学省の制定する学校教育法に基づく「履修証明プログラム」として実施している。対象者は社会人（市民）としており、総時間数120時間以上のカリキュラムを修了し、本学による認定を受けた者に対して履修証明書が授与されるものである。

このプログラムは、職業実践力育成プログラム（Brush up Program for professional）としても開講しており、地域活動を行われている方や、今後さらに地域活動を深めたい、広げたい、と考えている方を対象に地域振興やコミュニティに関する基礎知識や高齢社会における健康をめぐる諸問題について学ぶものである。本プログラムの履修を通して、地域活動に必要なファシリテーション能力や対人理解力、健康力アップ支援策を習得し、さらなるスキルアップを目指して取り組むことになる。

意見交換会

『高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム』（以下BP）の前期授業が終了し、７月24日に履修生と本学との意見交換会が実施された。交換会には11名のBP履修生が参加し、それぞれ活発な意見や感想を発表した。

井上晶子特任講師が「BP履修生が杏林での学びを自ら充実したものにしていて、素晴らしいことだと思う。この講座で提供するのはあくまでも『地域を活性化するために必要な方法』であって、そこに学部科目も複数用意しているのは、今まで知らなかったことや自分に足りないものを選び、補ってもらいたいという意図があるからである。『地域を活性化しよう』としてすぐに役立てられる技術はないが自分で学んだことや経験、人とのつながりをうまく活用して活性化につなげることが重要である」とこれからの活動に期待を寄せた。

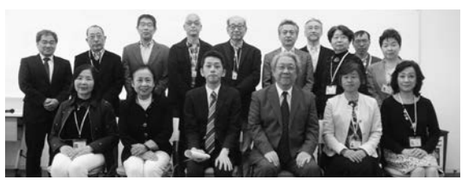
履修生と学生による活動

「交流人口増加策」について考察・企画し、実践することを学ぶ選択科目「特別講座B」では、BP履修生と学生・教職員が一緒になり、地域の魅力を発信する活動として井の頭キャンパスにて打合せを重ねてきた。履修生の経験とエネルギーは貴重な資源であるとともに、学びを実践に生かすためにチーム名を「みたか知り隊」として、新川や中原地区の果樹園・直売所の名所・旧跡をテーマとした「みたか知り隊ウォーク」の企画を進めてきた。

その後、度重なる打ち合わせを経て、一般の参加者を募ったうえで11月９日にBP履修生10名と在学生３名がホストとなり、新川や中原地区の自然と歴史探訪、果樹園での摘み取り体験・農業祭を体験した。三鷹産のお土産の用意など、履修生の綿密な計画、きめ細やかな配慮が参加者に好評だった。

修了式

令和元年度は11名が修了することとなり、３月18日に井の頭キャンパスにて修了式を予定していた。しかし、残念なことに新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて中止せざるを得なかったため、修了生には履修証明書を郵送する形式で修了を伝えた。修了生からは「自分の偏見を見直すきっかけ、日本の政治の仕組み、学生たちとの交流を含め、今を感じることができた。新たな知識で周りに役立てることができるようになりたいと思った」「一般講義は教授の熱心な講義に視野を大きく開くことができた」という声があった。



開講式

みたか知り隊ウォーク

杏林CCRC指定研究活動

① 健康寿命延伸

がん患者と地域社会のための加齢等に関する研究

■実施日：平成31年４月１日～令和２年３月31日
■担当者：
長島　文夫　医学部 腫瘍内科学 教授
古瀬　純司　医学部 腫瘍内科学 教授
水谷　友紀　国立がん研究センター 客員研究員
北村　　浩　医学部 腫瘍内科学 専修医
佐々木ヱリ　医学部 腫瘍内科学 実験助手
前野　聡子　医学部 腫瘍内科学 実験助手

研究目的（全体構想）

本研究は、健康寿命延伸を目標とし、杏林大学が中心となり健康社会の構築をめざすものである。がん患者と地域社会のための加齢等に関する以下のコンセプトに基づき各プロジェクトを推進する。

１．老年腫瘍学教育プログラム整備を進め、一般社会への普及を工夫する。
２．老年腫瘍学に関連する情報を整理し、老年腫瘍学研究室としての機能を構築する。

学術的背景と特色

【学術的背景】　超高齢社会を迎えて、高齢者のがんは増加している。高齢者は脳血管疾患や循環器疾患など多様な疾患を抱えることも多いため、バランスの取れた対応が必要である。ところが、老年腫瘍学という学問研究領域は本邦ではまだ確立しておらず、わが国の文化社会的背景も考慮した基盤整備が望まれている。

日本臨床腫瘍学会と国際老年腫瘍学会が協力して老年腫瘍学の教育プログラムを整備しているが、医療従事者や市民の認知はまだ低いのが現状である。また、高齢者機能評価に基づいた介入の意義については、各国において臨床的アウトカム改善を検証する試験が進行中である。

そうした状況の中で、ますます重要になるのが老年腫瘍学関連の教育・研究・診療の整理統合とその共有である。そこで杏林CCRC研究所は、老年腫瘍学の教育・研究・診療に関連する情報を探索、整理し、関連部門と協力する体制整備を進めることが重要である。

【学術的特色】　老年腫瘍学を専門に行う研究室はまだ本邦に存在せず、本邦初の取り組みである。

研究内容

１．老年腫瘍学教育プログラム整備と普及の研究

- 日本臨床腫瘍学会と国際老年腫瘍学会が協力して、老年腫瘍学の教育プログラムを作成しており、令和元年５月に第３回老年腫瘍学セミナーとして、高齢者のがん医療を担う医療従事者向けに開催した。これらをベースに、杏林大学での教育（医学部講義、大学院講義、市民公開講座等）に盛り込み、普及をめざす。
- 日本がん看護学会学術集会（令和２年２月22日）の教育講演にて「高齢者のがん診療」について説明し、同学会との連携を進めるべく調整を開始した。

２．老年腫瘍学に関連する情報を整理し、老年腫瘍学研究室としての機能を構築

（１）在宅患者への介護ロボット導入（AMEDロボット介護機器開発・標準化事業 / ロボット介護機器の科学的効果検証研究（研究代表者：松井敏史）と協力）

【背景・目的】　介護分野の人材不足、在宅での老老介護および介護離職の増加等が問題となっている。それらの問題に対する一つの解決方法として、ロボット介護機器の活用が期待され始めている。排泄用介護ロボットと入浴用介護ロボットを慢性期（がんを含む）の在宅患者へ導入し、被介護者の健康関連QOL（生活の質）の変化と、介護者の介護負担度の変化を比較することで、介護ロボットの有用性を検討することを目的とした。

【方法】　ロボット導入前後に主要評価項目をEQ-５D-５L（被介護者）、Zarit 介護負担度評価（介護者）、副次的評価項目はMMSE、GDS15、やる気スコア、ユーザビリティ評価とした。

（２）高齢者の見守りサービス

【背景・目的】　見守りが必要でかつ生活支援が必要な高齢者が増えている。高齢者の健康状態を見守り、リアルタイムで生体情報を把握し、生活支援につなげるニーズが増している。これまでに、AP TECH株式会社とスマートフォンを用いた見守りサービス用のアプリケーションソフトを開発しており、24時間365日の見守りが可能となるよう準備を進めている。

【方法】「Hachi」（図１）という見守り用のアプリケーションソフトを活用し、Apple WatchとiPhoneを用いて生体情報、位置情報、転倒、睡眠状態などのデータ把握が継続的に可能であるかを検討した。

図１　見守りアプリ「Hachi」の画面

（３）がん教育、その他

- 学校におけるがん教育外部講師研修に参加。学校側へどのように対応していくか、医療従事者への教授法の均てん化を図るため、経験のある薬剤師や養護教諭などにヒアリングを行った。
- AIを駆使した医療、教育、研究の具体的提案に関連して、CloudAce社（患者問診における音声採録の可能性とオンライン教育）、グーグルクラウドジャパン合同会社ヘルスケア事業部（高齢者およびがん患者のヘルスケアについて）、ViewSend社（医療用画像を用いた教育、オンライン診療の可能性）と協議を重ねている。

研究結果

１．老年腫瘍学教育プログラム整備と普及の研究

- 令和元年度の杏林大学医学部講義にて老年腫瘍学の内容を追加した。
- 令和元年11月２日に杏林大学市民公開講座「高齢者のがん治療」を行った(杏林大学井の頭キャンパスF309教室)。

２．老年腫瘍学に関連する情報を整理し、老年腫瘍学研究室としての機能を構築

（１）在宅患者への介護ロボット導入

【結果・考察】　EQ-５D-５Lの効用値が上昇し、やる気スコアが低下した。使用後の健康関連QOLが上昇することが示唆された。利用者アンケートからも患者の満足度は非常に高かった。介護負担度も減少し、介護ロボットの導入は有用であることが示唆された。次年度は、ロボット介護機器導入時の活用マニュアルを策定する予定である。

（２）高齢者の見守りサービス

【結果・考察】　定期的にAP TECH株式会社と打合せを行い、問題点を抽出し、アプリケーションソフトの修正を行った。腫瘍内科外来通院中の高齢がん患者を対象に実施可能性試験の研究計画書を準備し、令和２年３月に倫理委員会に提出した。次年度から患者登録予定である。

■令和元年度の成果発表　※下線は発表者

１．
佐々木ヱリ、前野聡子、河合桐男、小林敬明、岡野尚弘、北村浩、古瀬純司、長島文夫
「がん医療従事者に対するロボット介護機器のアンケート調査」
（第４回日本がんサポーティブケア学会学術集会、令和元年９月６日～９月７日、青森）

【背景・方法】

介護分野の人材不足、介護離職増加などの解決法としてロボット介護機器の活用が期待され始めている。がん医療に携わる25名を対象にがん患者に対してのロボット介護機器のニーズや印象についてのアンケート調査を行った。

【結果】

内閣府が行った「介護ロボットに関する特別世論調査」と同様に、排泄、入浴、移乗に関し、現状最も苦労している点であり、ロボット介護機器に対し期待されている点であるという結果が得られた。がん医療従事者の特徴的な回答として、せん妄等の精神的機能障害や術後がん患者の機能低下予防に対する要望も見られた。

【考察】

がん患者の場合、排泄や入浴の日常生活動作低下に直面する終末期は極めて短期間であるため、家族でも管理しやすい介護機器が望まれている。一方、術後患者に対する要望もある。病期に関わらず、介護者の負担軽減と患者の自立支援の両方に有用となる要因を検討していく。

学会での発表の様子

２．
前野聡子、佐々木ヱリ、河合桐男、小林敬明、岡野尚弘、北村浩、古瀬純司、長島文夫
「高齢がん患者における脆弱性の評価と介入を行った症例～各種ガイドラインの活用」
（第４回日本がんサポーティブケア学会学術集会、令和元年９月６日～９月７日、青森）

【背景・方法】

高齢がん患者の治療確立のため、エビデンス創出が課題であるが、多様性の高い高齢者は臨床試験の対象から外されていることが多かった。NCCNやASCOのガイドラインを参照し、認知機能が低下した高齢がん患者に対し診療を行った例を通し、本邦の実地診療における活用や課題について報告した。

【結果】

症例は胃癌術後再発77歳男性。認知機能低下の疑いがあり、詳細な高齢者機能評価を行った。MMSEやFABでの点数は問題が見られなかったが、HDS-Rを行い軽度認知症が認められた。本症例の場合、介護２の認定を受けていること、妻と介護士の息子と同居していたため、通院でも手厚いサポートが可能であった。

【結語】

GAでは認知症の診断には至らなかったが、実地診療では認知症が強く疑われた。このような患者に対しては、介護保険を活用することでケアマネージャーなどと情報共有を行いながら、患者が安心して治療できる環境を整える必要がある。海外ガイドラインは本邦の実地診療でも参考になることが分かった。今後は本邦の医療背景に即した実際的な手順の確立が期待される。

杏林CCRC指定研究活動

② 災害に備える
まちづくり

東日本大震災からの教訓と首都直下型地震への備え
米国ポートランドとの協業

■実施日：令和元年５月１日～令和２年３月31日
■担当者：
三浦　秀之　総合政策学部 総合政策学科 准教授
佐々木秀之　宮城大学 准教授
西芝　雅美　ポートランド州立大学 教授
伊藤　宏之　ポートランド州立大学 教授

背　　景

本学はポートランド州立大学とMOU（Memorandum of Understandingの略、了解覚書）を締結している。そのために、研究における相互交流が、交流を深化させる一つのきっかけになると考えられる。

ポートランド州立大学のあるオレゴン州では近い将来、大震災の発生が予測されることが、米国連邦政府によって平成27年発表の報告書に記載された。そうしたことを背景に、ポートランド州立大学の研究機構であるパブリックサービス研究・実践センター（The Center for Public Service、CPS）に、伊藤教授が率いるICDR（Initiative for Community and Disaster Resilienceの略）という研究所が設置された。これは災害とコミュニティに特化した研究所であり、同州では震災を含む災害に関する興味・関心が高まっている。

そうしたなかで、ICDRは平成29年度から５年間継続的に東日本大震災の教訓を学ぶためのプログラムを実施中である。“Learn From Each Other”を理念に掲げ、日本とポートランドが共に災害に備えるまちづくりを学び合うことを目的にしている。

この取り組みは、本学が進める杏林CCRC研究所における「災害に備えるまちづくり」という目的と合致している。また、ポートランド州立大学との協定をより包括的なものにするという観点においても、CPSとCCRCにおける研究は意義があるのではないかと考えられる。

研究目的

本研究プロジェクトは、杏林CCRC研究所、宮城大学、ポートランド州立大学の共同プロジェクトであり、フィールドワークを主としている。具体的には、東日本大震災の被災地および首都直下型地震に向けて災害に備えるまちづくりを実践している東京と、今後、大震災発生の確率が高まったオレゴン州ポートランドにおいて、主体となるアクターにヒアリングや意見交換を行うというものである。それを通して、災害に備えるまちづくりの知見をためるだけでなく、実践的な試みへとつなげることを企図している。

大災害が生じたとき、個人と家族および行政だけで救出・救助、避難介助や災害避難所の開設・運営などが担えるものではない。ご近所同士の地域を単位とした「共助」の対応行動がなされることが、我が国の大災害後の「地域コミュニティ」の特徴といえる。

東日本大震災後、災害に向き合うアプローチとして「減災」という言葉が広く聞かれるようになった。「減災」は、平成７年の阪神・淡路大震災後の被災地復興と日本各地での災害対策の再構築の中で確立されていったアプローチである。また、減災の担い手としてのステークホルダーという視点も欠かすことができない。

阪神・淡路大震災の被害要因解明と復興事業の進展に伴い、防災対策および災害対応の課題が明確になってきた。これまで災害発生時課題対応の「主体」としては行政が重視されていたが、阪神・淡路大震災を機に、公的セクター以外の担い手も重視する「自助」「共助」「公助」という概念が生まれた。災害時に自らを守る「自助」、近隣で互いに助け合う「共助」、公的機関による支援の「公助」が互いに連携し、一体となることで被害を最小限に抑えることができるとともに、早期の復旧・復興にもつながると考えられる。中でも「共助」、すなわち地域コミュニティが担う役割は大きい。

本研究では、東日本大震災において「自助」「共助」「公助」がいかにして機能したのかを掘り下げるとともに、今後、震災が発生する可能性が高い地域でこれらを機能させるための対応が現在どのように行われているのかを考察する。

フィールドワーク：被災された方からのお話（石巻）

石巻魚市場見学

石巻市役所におけるレクチャー終了後の集合写真

フィールドワーク：
三菱地所レジデンス株式会社でのレクチャー
（丸の内）

『そなえるドリル』ワークショップ

『そなえるドリル』ワークショップ集合写真

研究内容

今年度のフィールドワークでは、東日本大震災の被災地である宮城県・仙台、気仙沼、石巻と、首都直下型地震に備える東京都・丸の内と千葉県・津田沼で、まちづくりの観点からフィールドワークを共同で実施した。仙台と気仙沼は宮城大学の佐々木准教授が、石巻と東京、千葉は三浦がそれぞれ調整した。

宮城県の被災地では、杏林大学、宮城大学、ポートランド州立大学の研究者および学生とともにフィールドワークを実施した。特に今年度は石巻市復興政策課に多大なご尽力をいただいた。また、昨年度は東京都三鷹市を中心にフィールドワークを実施したが、今年度は防災に備えるまちづくりをソフト面で熱心に進める三菱地所の協力のもと、東京の丸の内と千葉県の津田沼を中心に調査を実施した。

研究結果

このフィールドワークをきっかけに、日本に住む外国人の方にも防災の備えを伝えることの必要性を考え、三菱地所レジデンス経営企画部企画広報グループ長の岡崎新太郎氏にご相談をさせていただいた。そして、同社が作成した防災ツール『そなえるドリル』と『そなえるカルタ』の英語版を協働で作成した。

本来であれば３月に米国ポートランドに赴き、次年度のフィールドワークの打ち合わせや『そなえるドリル』英語版の改善に向けた意見交換を、現地の防災関係者と実施する予定だった。だが、２月から急速に拡大した新型コロナウイルスの感染により、米国への渡航の自粛を余儀なくされ、本企画は来年度以降に先延ばしされることになった。

本研究を通じて、ご近所同士の地域を単位とした「共助」の対応行動が、大災害後の「地域コミュニティ」にとっては重要であることが改めて明らかになった。被害を最小限に抑え、早期の復旧・復興へとつなげていくためには、「自助」、「共助」、「公助」が互いに連携し、一体とならなければいけない。中でも「共助」、すなわち地域コミュニティが担う役割は大きいと考えられる。

沿岸部の津波避難タワー

防災復興団地における防災対策公園

杏林CCRC指定研究活動

③ 岩手県における地方創生

東日本大震災被災地域での復興期活動における内部人材と外部人材との連携ネットワーク構築プロセスに関する比較研究

■実施日：令和元年５月１日～令和２年３月31日
■担当者：古本　泰之　地域交流推進室 室長
井上　晶子　地域交流推進室 特任講師
依田　千春　地域交流課 課長
小野寺純治　岩手大学 特任教授

学術的背景

平成23年３月に発生した東日本大震災（以下、震災）から９年が経過し、被災地域は初動・応急・復旧の段階を経て復興期へと推移してきた。復興庁も、現在の被災地は「復興・創生期間」にあるとしている。

この期間で重要なのは、被災者の経済的地盤の構築、つまり生業の再生や新たな産業の創出といえる。その取り組みはすでに各地域で多種多様な内容で展開されている。そして、その大きな切り口の１つとして挙げられるのが「交流人口（関係人口）の増加」である。

この取り組みには、来訪者が地域での復興・創生活動にどの程度関与するかという点でグラデーションがある。「復興をテーマとしたツアーで宿泊観光者を増加させ、旅館業や農林水産業などの生業の復興・再活性化につなげる」といったものから、「生活拠点以外の活動拠点を被災地内に持って新たな地域振興活動に参加する実践者を集める」といったものまで広範囲に及んでいる。

筆者たちはこれまで、杏林CCRC研究所の取り組みの一環として、平成29年度から岩手県釜石市と福島県相馬市で交流人口増加に向けた動きについて、教育活動も含めた調査を行ってきた。その中で、両地域には「人口規模」「地理的条件」「震災による被害と復興状況」「震災以前の主幹産業の状態」などにおいて類似している部分が多いにもかかわらず、大きく異なる点があることが明らかになった。交流人口増加に向けた取り組みと、それを推進する上で中心的な役割を果たす人的ネットワークの構成状況が全く違うのである。

両地域の違いがどのようなものであり、その違いがどのような要因で発生したのかを明らかにすることは、復興・創生期の交流人口増加の取り組みの整理や、地域の人材活用のあり方を考える上で、重要な成果になるものと考えた。

研究の全体構想と具体的な目的

既往の震災復興・被災地を舞台とした観光に関する研究的状況を踏まえ、これからの実践的な側面で考えると、複数の事例を整理・比較した研究がこれまで以上に求められる段階に入っている。

例えば、震災を契機とした新たな観光資源の創出における地域内関係者のネットワーク化プロセス、補助費制度に基づく外部人材の活用（の手法とその結果）などの視点が新しい切り口として想定される。このような研究において、個別地域の状況を詳細に調べた上で、複数の地域を比較することを通じて、類型（モデル）化と各類型におけるメリット・デメリットの整理が可能になる。

そこで令和元年度の指定研究では、複数の事例を整理・比較した研究の端緒として、釜石市と相馬市の交流人口増加の取り組みにおける相違点とその背景について、地域内部と地域外部の人的パワーの状況とその人的ネットワークの構造、さらには両市の相違点の背景を明らかにすることを試みた。

フィールドスタディ

釜石大観音仲見世

実施内容

実施責任者（古本）および分担者（井上）が取り組んできた既往の研究・教育実践の成果を踏まえ、令和元年度の具体的な活動を以下のように設定した。

１）既存研究および資料（新聞・雑誌記事など）の収集・分析
２）釜石市･相馬市における「復興活動」に携わる関係者･組織へのヒアリング調査
３）上記１）２）の成果を踏まえて、釜石市では外国語学部「フィールドスタディⅣ」、相馬市では外国語学部「ゼミナール１・２」を展開し、教育・社会貢献活動の現場における復興活動組織の動きを学生との連携活動を通じて比較した。また、その引率において古本・井上が行ったインタビュー調査・参与観察の内容も、研究成果の一部として追加した。
４）上記１）～３）の研究成果については、「日本観光研究学会第34回全国大会：口頭発表」「杏林大学研究報告・第36巻：原著論文投稿」「第８回杏林CCRCフォーラム：抄録集」に発表した。

研究結果

本研究の成果として、復興における交流人口増加に向けた活動について、釜石市と相馬市との相違点が明らかになった。釜石市は住民・行政共に外部の力（外部人材）を巧みに取り入れる「開放性」を持って取り組んでいる一方で、相馬市では内部人材のつながりを強固にする「閉鎖性」を有していたのである。この相違は偶発的な現象ではなく、危機だからこそ従前の地域ごとの特徴が明確に現れたとみることができる。

①釜石市

産業の成り立ちから現在に至る歴史においては、その時々の社会経済状況を反映した外部資本の力が働き、市の浮沈は外部の状況に大きく左右されてきた。

官製から始まった企業城下町は、外部資本、システム、労働力を取り込むことによって成り立っていた。外部からの危機に対して外部の力を活かすことで乗り越え、また、外部者とその活動を受け入れる開放性を備えることで、時には依存的に見えながらも、町の繁栄を保ってきた歴史がある。

②相馬市

廃藩置県まで何百年にもわたって藩主の交代がなされなかった歴史を持つ城下町である。豊かな海の恵み・土地の恵みを持ち、外部からの変化圧力がないために、閉鎖的な風土と共に地域独自の文化が生まれ、それぞれの場所に密着した生業を地域内で育ててきたのである。いわば独立性を持っているといえよう。

以上のように、２つの地域はその生業の成り立ちと継続において、片や外部の力の影響を強く受け、片や内部の力の結束が求められたという異なった歴史を持つ。震災が招いた現在の危機における組織や人の動きは、過去のそれらと共通する要素を持ち、同じ路線上にあることが読み取れる。交流人口増加の取り組みにおける現在の違いの背景にある、過去と現在で共通するこうした「地域の文脈」に基づく人々の意識・地域とのかかわり方が、現在の危機状況を乗り越えなければならない状況下ではっきりとその姿を現したといえる。

令和元年新設の「うのすまい・トモス」（釜石市）

令和元年新設の「魚河岸テラス」（釜石市）

地域における
研究活動 ①

障がい者スポーツボッチャが地域高齢者の身体面、心理・認知機能面へ与える影響

■実施日：令和元年 9 月28日（土）、10月25日（金）、12月13日（金）
■担当者：
一場　友実　保健学部 理学療法学科 准教授
菊池　佑維　千葉リハビリテーション病院 理学療法士

背　　景

ボッチャ（Boccia）競技は、脳性麻痺者や上位頸髄損傷者を中心とした重度四肢麻痺者が参加できるターゲットスポーツである。ジャックと呼ばれる白い目的球に赤または青それぞれ 6 球ずつのカラーボールをいかに近づけることができるかを競う競技である。

1988年よりパラリンピックの正式種目になり、2016年リオデジャネイロパラリンピック大会では、日本選手がボッチャ競技団体戦（BC 1 /BC 2 混合）で初の銀メダルを獲得した。東京2020（2021年開催予定）オリンピック・パラリンピック大会でのメダル獲得が期待される競技の一つである。

ボッチャは障がい者のために考案されたスポーツである。そのために、この競技を健常な高齢者が実施した際の効果などについての報告はほとんど認められない。

そこで、本研究は地域高齢者にボッチャ競技を体験してもらい、ボッチャ競技が地域高齢者の健康増進運動として身体的効果が認められるか、また精神・心理面へ影響を与えるか、多角的に検討を行うことを目的としている。

平成29年度にはボッチャを通じた地域のスポーツボランティアの育成という研究課題で助成をいただき、三鷹市民への介入の結果、高齢者のボッチャクラブの立ち上げに至った。現在では市も承認の「ボッチャの輪を作ろう会」というグループが立ち上がり、月に 4 ～ 5 回さまざまな場所でボッチャのスポーツボランティア・競技普及の活動を行っている。

平成30年度には、ボッチャを通じた地域高齢者の健康増進運動としての効果に関する研究で助成をいただいた。その研究の成果として、ボッチャによりポジティブな気分が上昇し、また転倒リスクの軽減に影響を与える可能性があることが示唆された。

研究内容

今年度は、研究をさらに発展させ、ボッチャが地域高齢者の身体面、心理面さらには認知機能面にどのような効果があるかを多角的に研究した。また、今回は研究協力者として日本ボッチャ協会にも所属している千葉リハビリテーション病院の菊池佑維先生にご協力いただいた。

今回の研究は、三鷹市の 3 カ所のサービス付き高齢者住宅に入居していて、自主的に参加を表明した23名から体験前後のデータが取れた女性20名を対象とした。その平均年齢は83.1±4.76歳だった。

対象者には、まずスライドを使用してボッチャ競技の歴史やルールの説明を行い、次いでデモンストレーションを見学してもらい、その後、実際に競技を体験してもらった。評価項目、方法は以下のとおりである。

1．**唾液アミラーゼ活性によるストレス評価（Fig.1）**
唾液採取チップの先端部を舌下に入れ、30秒後舌下部から直接唾液を採取した。

2．**POMS 2（Profile of Mood States 2nd Edition）日本語短縮版による気分調査（Fig.2）**
７種類の感情尺度が35項目で表現されており、35項目の質問に対して 5 段階で選択。

3．**GDS15（Geriatric Depression Scale 15）による老年期うつ病評価尺度（Fig.3）**
質問は15項目からなり、「はい、いいえ」で回答。

4．**左右片脚立位保持時間**

5．**CS-30（30-seconds chair-stand test）30秒椅子立ち上がりテスト**

6．**握力**

ボッチャの歴史とルール説明

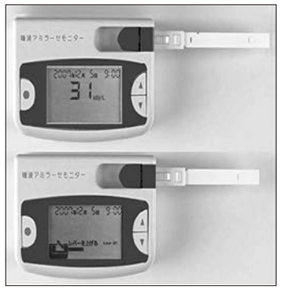


Fig. 1　唾液アミラーゼ式交感神経モニター＆チップ

Fig. 2　POMS 2 日本語短縮版による気分調査

老年期うつ病評価尺度（Geriatric depression scale 15；GDS15）

No.	質問事項	回答	
1	毎日の生活に満足していますか	いいえ	はい
2	毎日の活動力や関面に対する興味が低下したと思いますか	はい	いいえ
3	生活が空虚だと思いますか	はい	いいえ
4	毎日が退屈だと思うことが多いですか	はい	いいえ
5	大抵は機嫌よく過ごすことが多いですか	いいえ	はい
6	将来の漠然とした不安に駆られることが多いですか	はい	いいえ
7	多くの場合は自分が幸福だと思いますか	いいえ	はい
8	自分が無力だなあと思うことが多いですか	はい	いいえ
9	外出したり何か新しいことをするより家にいたいと思いますか	はい	いいえ
10	何よりもまず、もの忘れが気になりますか	はい	いいえ
11	いま生きていることが素晴らしいと思いますか	いいえ	はい
12	生きていても仕方がないと思う気持ちになることがありますか	はい	いいえ
13	自分が活気にあふれていると思いますか	いいえ	はい
14	希望がないと思うことがありますか	はい	いいえ
15	周りの人があなたより幸せそうに見えますか	はい	いいえ

1、5、7、11、13 には「はい」0 点、「いいえ」に 1 点を、
2、3、4、6、8、9、10、12、14、15 にはその逆を配点し合計する。
5 点以上がうつ傾向、10 点以上がうつ状態とされている。

Fig. 3　GDS15による老年期うつ病評価尺度

研究結果

ボッチャ体験前後でのPOMS 2 のT得点の結果をTable 1 に示す。ボッチャ体験後にネガティブな気分状態を表すTMDは低値を示し、ポジティブな気分状態を表すFIは高値を示した。

体験前後での唾液アミラーゼ活性・GDS15・左右片脚立位保持時間・CS-30・握力の結果をTable 2 に示す。唾液アミラーゼ活性値は、体験前後で上昇したのは 9 名、減少したのも11名であり、ボッチャ体験によるストレスの増加は認められなかった。

また、GDS15は、体験前にうつ傾向との判定は 3 名、うつ状態との判定は 2 名であったが、体験後はうつ傾向との判定は 2 名、うつ状態との判定は 1 名であり、ボッチャ体験によるうつ状態の増悪などは認められなかった。左右片脚立位保持時間、CS-30、握力には有意な差は認められなかった。

まとめ

POMSの結果より、ボッチャ体験によってポジティブな気分状態は増加し、逆にネガティブな気分状態は減少することが認められた。またストレスの増加やうつ病の悪化も認められなかった。体力評価については改善傾向は認められるものの、有意な差は認められなかった。

ボッチャ体験の様子

以上のことにより、ボッチャによる介入はシニア世代の心理面の改善には効果が認められた。

今回は、ボッチャの体験前後と一時的な介入効果について検討を行った。今後は、一時的ではなく継続的にボッチャを実施した際にどのような効果が表れるのかを検討することなどにより、心理面だけではなく、身体面にも影響を与えることも考えられる。

これまでの研究の成果を踏まえつつ、今後もさらなる検討を行っていきたいと考える。

Table 1．　ボッチャ体験前後でのPOMS 2　T得点

	Before	After	p value
TMD	45.0 ± 6.00	43.0 ± 7.29	0.046*
AH	43.3 ± 5.56	41.2 ± 6.53	0.082
CB	46.7 ± 7.01	45.8 ± 9.52	0.530
DD	49.9 ± 5.72	47.5 ± 6.65	0.116
F I	45.0 ± 6.58	45.0 ± 8.23	1.000
TA	44.2 ± 7.51	43.4 ± 6.80	0.674
VA	53.0 ± 11.5	56.5 ± 11.6	0.096
F	45.9 ± 11.7	50.7 ± 11.9	0.020*

TMD：総合的気分状態　AH：怒り - 敵意　CB：混乱 - 当惑
DD：抑うつ - 落ち込み　F I：疲労 - 無気力　TA：緊張 - 不安
VA：活気 - 活力　F：友好
*p＜0.05　Data presented as mean ± SD

Table 2．　ボッチャ体験前後での唾液アミラーゼ活性・GDS15・体力評価

	Before	After	p value
唾液アミラーゼ活性（KU/L）	39.4 ± 58.2	41.4 ± 53.8	0.874
GDS15	3.00 ± 3.88	2.30 ± 3.40	0.135
右片脚立位（sec）	22.1 ± 21.5	26.0 ± 22.5	0.086
左片脚立位（sec）	13.8 ± 15.7	19.0 ± 19.8	0.076
CS-30（回）	15.3 ± 5.79	16.9 ± 4.61	0.077
握力（kg）	17.9 ± 3.68	17.9 ± 3.74	0.973

Data presented as mean ± SD

地域における
研究活動 ②

特別な支援を必要とする子どもの保育園生活における課題

■実施日：令和元年５月～令和２年３月
■担当者：
石野　晶子　保健学部 看護学科 講師
太田ひろみ　保健学部 看護学科 教授
場家美沙紀　保健学部 看護学科 学内講師

背　景

新生児医療の進歩により、多くの重症な新生児が救命されるようになった。一方、NICUなどでの長期間入院を経て、退院後も医療的なケアが必要な子ども、“Major handicap”はないが発育・発達上で育ちづらさや育てづらさを抱える子ども、慢性疾患がある子どもなど、長期にわたる特別な支援が日常的に必要な子どもが在宅で生活するようになった。

その結果、以前は就学後に表面化していた特別な配慮が必要な子どもの課題が、低年齢で表面化するようになってきている。そういう現状がある。

特別な配慮の有無に関わらず、乳幼児期の子どもの発育・発達支援は重要であり、身近な地域での子どもに対する発達支援及び保護者に対する子育て支援が求められている。

研究目的

本研究の目的は以下の２点である。

１．特別な支援を必要とする子どもの保育を実践する保育士ニーズを明確にする。

２．保育の現場での発達支援の在り方を検討する。

それらの目的に沿って、１については各地域の保育所における特別な支援を必要とする子どもに対する保育体制、保育士の対応経験の有無、地域での支援体制を把握する。

２については、特別な支援を必要とする子どもへの保育の実践内容、実践にあたり生じた困難・課題、効果、子どもの変化を把握する。

そして、それらの結果を踏まえ、乳幼児期の特別な支援を必要とする子どもに対する保育体制、保育の実践における課題を提示する。また、育児支援を含む特別な支援を必要とする子どもに対する発達支援の在り方を提言する。

研究方法

本研究では、以下の２つの調査を実施した。

調査１

保育所における障害児保育体制、特別な支援が必要な子どもの保育実践の有無と内容把握、諸機関との連携体制に関する実態調査。調査対象は、A市13施設の園長13人。

調査２

保育所勤務の保育士の特別な支援が必要な子どもの保育に対する認識、困難さ、保育士が必要とする支援などの認識調査。調査対象は、調査１を実施した園に勤務する保育士230人。

いずれの調査も、対象には無記名自記式質問紙調査を実施した。得られた回答はデータ化し、統計解析ソフトSPSSで分析した。調査にあたっては、対象としたA市各保育所園長に調査概要・方法を文書及び口頭で説明を実施し、承諾を得た。なお、本研究は杏林大学保健学部倫理審査委員会の承認（承認番号30-63）と自治体の許可を得て実施した。

研究結果

調査１

- 調査対象13施設中10施設から回答を得た。回収率76.9%。
- 10施設の保育数平均は31人、保育士平均年齢は37.2歳だった。
- 10施設中９施設（90%）で特別な支援が必要な子どもが在籍していた。
- 各施設における子どもの年齢と人数を**表１**に示した。特別な支援が必要な子どもの診断名及び支援が必要な理由をまとめた（**表３**）。

調査２

- 230人中174人から回答を得た。回収率75.6%。
- 平均年齢は33.9歳、保育士歴平均は11.8年だった。
- **『特別な支援が必要な子どもの保育経験がある』**は、174人中136人（78.2%）だった。
- **『病児保育・障害児保育に関する研修の有無』**は、「病児・病後児保育研修あり」が174人中28人（12.7%）、「障害児保育研修あり」は174人中95人（43.2%）だった。
- **『特別な支援が必要な子どもの保育』**に「肯定的な保育士」は174人中66人（37.9%）、「どちらでもない」が39人（22.4%）、「支援内容による」は35人（20.1%）、「否定的」が６人（3.4%）だった。
- **『保育に対する不安』**は、「不安ある」と回答したのは174人中138人（79.3%）だった。
- **『不安に思う内容』**について複数回答可として回答を得た。保育士が不安に思う上位３項目は、１番目が「緊急時の対応」81人（58.7%）、次に「医療的な判断」64人（46.4%）、３番目は「ケアに必要な技術」54人（39.1%）だった。
- **『特別な支援が必要な子どもの保育に困難感がある』**と答えた保育士は、136人中127人（93.4%）だった。その127人中126人は「困難感がある際は相談」していた。
- **『困難感がある際の相談相手』**の内訳は、「同僚の保育士」108人（85.7%）、「園長」83人（65.9%）、「主任保育士」91人（72.2%）、「保育所の看護師」56人（44.4%）だった。

まとめ

保育での特別支援が必要な子どもの疾患や障害などはさまざまであり、特別支援及び配慮内容も多種多様であり、加配の保育士や看護師を配置し対応していた。集団の中で周囲の子どもとの調和や対象児の安全保障への配慮を保育所全体でチームを組み実践していた。さらに、保育士・看護師が役割を分担し、情報を共有し模索しながら個別な対応を実践していた。

一方、保育士は困難がある際も解決方法は園内で完結することが多く、他の関連機関との連携は不充分だった。８割の保育士に特別支援が必要な子どもの保育経験があったが、病児・病後児保育の研修経験は少なかった。さらに、８割の保育士が不安を感じていた。不安内容上位は、緊急時やケア技術等、医療的知識や技術だった。

今後の課題としては、①研修機会の充実（緊急時、特別支援に必要な医療的知識・技術、研修内容の見直し及び充実）、②地域の関係機関との連携強化（相談機能・専門職による施設支援の充実）が示された。

表１　特別な支援が必要な子どもの年齢と人数

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	合計（人）
A			2	3	3	3	11
B				2	2	2	6
C						1	1
D		2	4	3	7	5	21
F			1				1
G						1	1
H				1		2	3
I		2	2	4	5	8	21
J				6		2	8
合計（人）	0	4	9	19	17	24	73

表２　特別な支援を必要とする子どもの保育体制

- 無回答除く８施設、全保育所で加配あり。
- ８施設全ての保育所に看護師が配置。
（常勤５施設、非常勤２施設、常勤・非常勤両方３施設）

★加配の方法：８施設中
- ７施設でクラス担当保育士を複数配置。チームで保育。
- １施設は、研修を積んだ早期発達支援士・発達支援ファシリテーター資格を取得した職員を中心に関わっていた。

★加配の保育者の職種：７施設中
- 保育士７施設、看護師４施設。

表３　特別な支援が必要な子どもの診断名及び支援理由

	年齢	診断名及び支援理由	配慮内容
C	5歳	• パニック・多動・不注意。 • 思い通りにならない時の感情が抑えられない。	• クールダウンする場の提供。 行動の背景を考え、場に応じたコミュニケーション指導。
D	3歳	• 多動。危険行動伴うこと有。喃語のみ。 • 一人遊びが主。　• 他児との関わり少ない。 • 集団活動が難しい。	• 個別プログラム実施（週２回）。舌の動かし方、１対１での簡単なやりとり遊びの実施。 • 保護者面談を適宜実施。
	3歳	• 知的障害（中程度）。　• 言語、運動発達遅滞。 • 歩行不安定。　• 理解力低い。	• 歩行不安定→１対１対応。 • 児の発達レベルに活動を合わせる。→玩具の準備。
	4歳	• 食物アレルギー。　• アナフィラキシー発症歴あり。 • エピペン処方あり。	• 職員全体でのエピペン、内服薬、緊急時対応の研修実施。 • 調理師、看護師と情報共有。看護師、調理師、保育士でアレルギー会議の実施（月１回）。 • 子どもへのアレルギー教育。
	5歳	• 自閉症スペクトラム。　• 集団活動が難しい。 • 他児との関わりが少ない。　• こだわりが強い。	• 個別のスケジュール表を使用。 • 集団行動は無理ない程度に参加。参加が難しい時は個別の課題を実施。
	5歳	• 自閉症スペクトラム。　• 多動・会話難しい（一方的・脈絡なし）。 • 危険行為がないか見守り必要。　• 指示内容の理解難しい。	• 感覚遊具の導入。１人で遊べる玩具の制作。 他児との関わりは大人が仲介。活動合間の声掛け及び付き添い。
F	2歳	• 知的障害。　• 着替えの執着。　• 意に沿わないと癇癪を起す。	• 気持ちを受け止めるよう、都度対応。できることが増えるよう支援。
G	5歳	• 二分脊椎・導尿必要。　• 車椅子で散歩。	
H	3歳	• ファイファー症候群。	• 午睡時、Nsがエアウエイ挿入。 • 午睡中は酸素15分毎に確認、記録。鼻吸引。食形態配慮・介助。
	5歳	• 自閉症。	• 個別介入が必要な場面のフォロー（コミュニケーション、生活の切り替え・活動の部分介助）。 • 体操、マッサージ等、個別活動。
	5歳	• ダウン症。	• 個別介入が必要な場面のフォロー（コミュニケーション、生活の切り替え・活動の部分介助）。 • 体操、マッサージ等、個別活動。
I	1歳	• 言葉の遅れ。呼名への反応薄い。 • 他者への関心・愛着関係の希薄。　• 感覚過敏。	• １対１の愛着関係の形成。 • 感覚刺激を入れる。
	1歳	• 熱性けいれん多発。　• 体幹不安定。 • 胎児期に医師から知的な遅れ、耳の障害を指摘されている。	• 看護師が常時見守り・体温計測、記録。 保健センターと連携。
	4歳	• 自閉症（愛の手帳３度）申請中。　• 療育通院ST・OT。 • 皆と一緒に行動ほぼ不可能。	• １対１及び０～１歳児レベルで対応。
	4歳	• 自閉症。療育通院中。　• 集団活動できない。　• 感覚過敏あり。 • 言葉での簡単なやり取り、一方的な感情表現は可能。	• １対１対応。
	5歳	• 自閉症スペクトラム。　• 療育通所（週２日）。　• ST通院中。	• 個別支援→　• 他児との距離感を知らせる。 • 姿勢保持するため座席を配慮する。
	5歳	• 自閉症スペクトラム。　• 多動。	• 個別指示。集中できる環境づくり。　• 褒めて伸ばす。
J	2歳	• 熱性けいれん。	• 予防座薬（ダイアップ）を預かり保管。 • 体調変化時は頻回に検温。
	3歳	• 自閉症疑い。　• 母子家庭。	• 加配保育士申請。　• 巡回相談利用。 • 写真等活用。見てわかる環境づくり。 • 母親、担当保育士、看護師で随時面談。
	3歳	• 肝疾患。	• 戸外では加配看護師が付き添い。　• 昼食時MCTオイル使用。 • 午前中おにぎり補食。血糖値、必要時測定。 • 保護者、園長、看護師による面談を適宜。
	3歳	• 多動。感情起伏激しい。 • 母子家庭。	• 加配保育士配置。 • 保健センター、巡回相談へ連絡・連携。→支援機関を増やす。 • 母親、担当保育士、看護師が適宜面談。
	4歳	• アナフィラキシーショック既往。（ピーナッツ）	• アレルギー疾患生活管理表に従う（除去食）。 • 専用の容器を使用、他児の食事と区別。　• 献立表を保護者に確認。 • エピペンを預かり保管。　• 保護者、管理栄養士、看護師と年１回相談。
	5歳	• 房室中隔欠損。　• 総肺静脈還流異常症。 • ペースメーカー挿入中。	• 加配保育士配置。　• 生活管理指導表に従う。 • 酸素、パルスオキシメータ使用（体調変化時）。

地域における
研究活動 ③

入院を契機にして変化する包括ケアに関する研究：家族構成が地域包括ケアに及ぼす影響に関する研究

■実施日：平成31年４月１日～令和２年３月31日
■担当者：
吉野　秀朗　医学部 特任教授
古田　博子　野村病院 看護部長
名田部明子　野村病院 医療ソーシャルワーカー

背　　景

平成12年４月、「家族介護の負担」を社会の問題として取り上げ、「入院」ではなく「在宅」を療養の場として選択できるよう、「家族による介護から社会による介護へ」というスローガンのもと、介護保険制度が新たに導入された。

平成25年には「病院完結型」体制から「地域完結型」体制への転換が目指され、新たな仕組みとして地域包括ケアシステムが選択された。自施設のある三鷹市においても平成27年３月に「高齢者計画・第６期介護保険事業計画」が策定され、地域包括ケアシステムの構築への取り組みがスタートしている。

自施設においては、一般病床の在宅復帰率は約92%であるが、入院中にADL（Activities of Daily Livingの略、日常生活動作）低下や認知機能低下、医療処置の継続等により住み慣れた場所への退院が困難となるケースが増加している。

本研究では、入院を契機に入院前と異なる生活の場に退院した患者の家庭環境を含めた家族構成がどのような影響をもたらしているのかを調査し、明らかになった要因をもとに今後の課題を考察する。

研究目的

在宅療養中の患者が重症化し、入院療養が必要になった場合には、在宅療養から入院、そして退院し再び在宅療養へという一連の流れがスムースに行われることは、充実した地域包括ケアシステムが維持されるための基本事項である。そのシームレスな包括ケアシステムの推進を妨げる要因を明らかにし、解決に向けた方策を提案するのが本研究の目的である。

研究内容

「大学病院における高齢者早期退院の阻害要因に関する研究（平成15年）」でのアンケート調査に用いられた「退院阻害要因」項目を使用し、入院前と退院後とで生活の場が異なる患者を対象に、アンケート調査を実施した。その結果を基に、家族関係に視点をおき、退院先の決定に影響した阻害要因を明らかにする。

〔対象者〕平成30年10月１日～令和元年11月30日の期間に入院し、退院後に入院前所在地に戻れなかった患者149名。

〔倫理的配慮〕本研究は、医療法人財団慈生会野村病院倫理委員会の承認（承認番号R１-７）を得て実施した。口頭および書面で説明し同意を得た。

研究結果

１）家族関係

・『**家族関係の独居・別居**』では「独居」34%、うち90%は別居している家族との関係性は良好で、病状の説明や退院先の相談ができる状況だった。「同居」は45%で、主な内訳は「高齢」（高齢者との二人暮らし）17%、「未婚の子（孫）」（未婚の子または孫との二人暮らし）17%、「世帯」（世帯のある家族と暮らしている）７%となっており、家族の身体的サポートなどが受けられる状況下だった。

・『**退院阻害要因**』をみると「心理的側面」では、家族関係に関わらず「該当なし」が74～88%を占め、「療養に関する知識不足」が８～11%だった。

・『**患者の身体状況**』では、「独居」「同居」共に「ADL低下による介護要」が大きな要因となり、「認知症による異常行動」と合わせると全体の72～80%を占めた。「認知症による問題行動がある」のみの要因は約10%だった。

・『**環境**』では、「自宅の構造」が８%、「医療処置」が「独居」25%、「同居」７%と差がみられた。

・『**処置内容**』をみると、全体では「点滴管理」「頻回の吸引」が圧倒的に多く、「独居」では「尿カテーテル」「疼痛管理」も要因の一つとなった。

２）同居家族構成

・『**同居家族構成別**』に「高齢」「未婚の子（孫）」「世帯」による阻害要因を分析した。「世帯」「高齢」では、終日家にいることが多く、「未婚の子」では、日中独居になる時間が多かった。また、「世帯」では、健康者が多く、「未婚の子」「高齢」では、「世帯」に比べ健康である比率が低く、介護者自身が要介護者である比率が高かった。

・『**心理的側面**』では、「未婚の子」に病院志向やサービス拒否、病状の理解が不十分など多くの要因が見られた。

・『**患者の身体状況**』では、「世帯」は介護度がない生活支援を必要とするが要因に挙がったが、認知症による問題行動のみは挙がらなかった。「高齢」では、要因の20%が認知症による問題行動のみであった。「環境」では、「未婚の子」「高齢」は医療処置が５割以上を占め、医療処置への対応が困難であることが明らかになった。特に「高齢」では「頻回の吸引」が大きな要因に挙がった。「世帯」では「医療処置内容」が限局した。

考　　察

１）すべての家族関係において、ADL低下は退院阻害要因として高い割合を占めている。また、それを支える役割を担う同居家族のマンパワーが低いほど、退院阻害因子としての割合が高くなっている。介護保険など、在宅サービスの充実が図られてきている現在でも、在宅介護において家族介護の重要性が依然高いことがうかがえる。

２）平成19年に行われた「一般病棟における社会的入院継続患者の理由別全国推計値」において、「入院継続」理由の１位は「家族の介護困難or介護者不在」だった。だが、最終的には家族の介護力に依存するという傾向は現在も変わっていない。特に「医療処置」はヘルパーが行えないものも多く、「家族がいない」または「家族が高齢等で対応できない」ことが退院阻害要因に直結している。

３）三鷹市高齢者計画・第７期介護保険事業計画によると、三鷹市は「高齢夫婦のみの世帯、高齢者単身世帯が多く、多世代･多人数で構成される世帯の割合が少ない」といわれている。

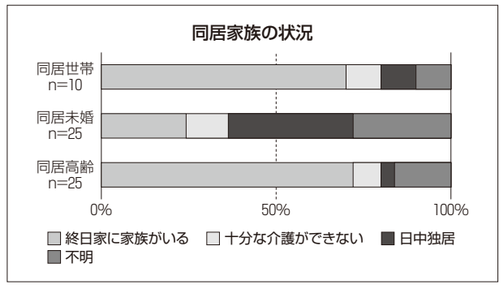
４）今後増加する高齢患者においては、特に家族背景・在宅介護情報が重要となる。緊急入院が多い自施設の特徴から、入院前の計画的な情報収集は困難である。アドバンス・ケア・プランニングや在宅での療養生活の希望も含め、ケアマネジャーや介護関係者、在宅医療関係者との連携が重要になる中、自施設においてもさらなる地域連携の強化が求められる。

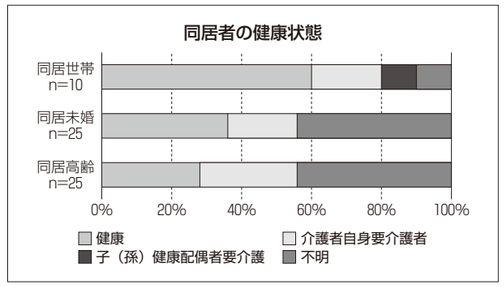
まとめ

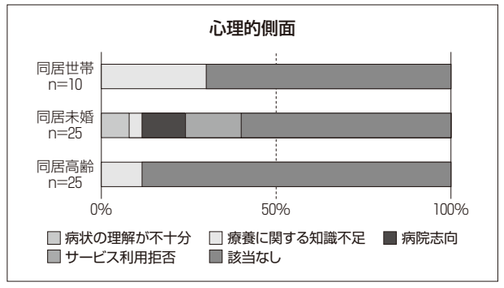
１）緊急入院、高齢者が多い当院において退院先の決定に影響を及ぼした大きな要因は、入院を契機に変化したADL低下と認知症による問題行動、医療処置である。

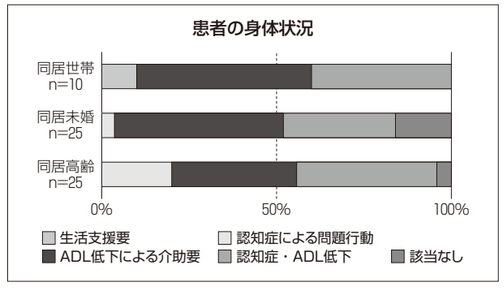
２）家族構成員の特徴により要因が異なるため、入院直後から退院先を予測した介入が必要である。

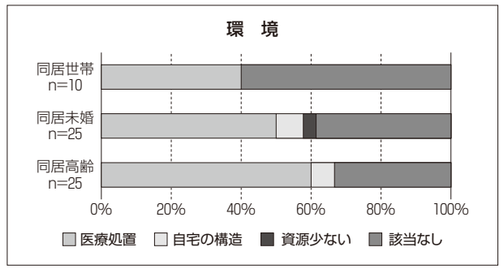
３）在宅移行支援を行うためには、地域との連携の強化、ならびに患者・家族の意思決定支援が重要である。

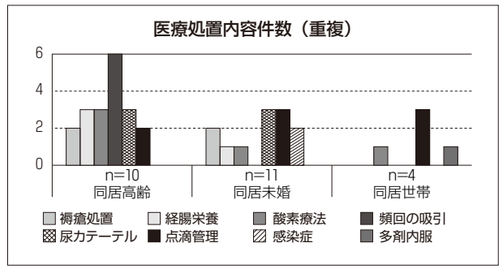












地域における
研究活動 ④

三鷹市クラシックバレエ教室受講生の障害予防について

■実施日：令和元年６月１日～12月30日
■担当者：
若林　俊夫　付属病院リハビリテーション室 理学療法士

背　　景

クラシックバレエでは脚や体幹に過剰な柔軟性を求められるので、競技レベルになるとバレリーナには故障が絶えなくなる。特に成長期に故障してしまうと、その後の競技や、競技をやめた後などに慢性的な関節疾患（変形性関節症）などになりやすくなってしまう。

そういう状況であるにもかかわらず、クラシックバレエの動作解析や障害予防・その対策などについての報告・文献が少ないというのが現状である。バレリーナを目指す子どもたちが、安心してその夢の実現に向けて努力し続けられるように、科学的な障害予防対策の確立・普及が望まれるところである。

研究目的

日本ではクラシックバレエ人口は40万人程度いるとされ、世界でも有数のバレエ大国である。そのレベルはプロフェッショナルなダンサーからいわゆる“お稽古事”として習う人まで多様である。しかし、どのレベルにおいてもトゥシューズを履いたときのつま先立ちや、180度の開脚など無理な体勢がたたって、足・膝・股関節などのケガや故障と隣り合わせである。

平石らによると「プロフェッショナルレベルの調査にて足・足指の故障が全体の60%程度、続いて股関節・膝関節と続き、下肢の故障でおよそ80%程度であった」とされている。この数字は決して見過ごしにできるものではない。

そのため、今回は比較的故障の多いとされる下肢関節の機能について、成長期で起こる特徴を調べるべく、故障についてのアンケート調査と足関節・足部に過剰な可動域を必要とされるドゥミ・ポアント（踵を上げ足の指全体で体重を支える）や、ポアント姿勢（トゥシューズを履き、つま先で立った）についての下肢三次元動作解析を行う。

研究計画

対象者：10名（三鷹市のクラシックバレエ教室に通う小中学生で、保護者に同意の取れている方）
活動場所：杏林大学保健学部井の頭キャンパス
活動内容：三次元動作解析機によるバレエ動作の解析、身体機能計測、アンケートの実施。後日、その結果を個人に紙面でフィードバックする。有効なデータが取れれば、学会発表を行う。
時間：対象者１名当たり１時間程度、１日３～５名の計測。保健学部の授業とかぶらず、小中学生との授業ともかぶらない土曜日・もしくは夏季長期休暇中を検討。
達成目標：足趾・足関節運動の特徴を健常人と比較し、特徴的な関節の動き、力の発揮方法を計測すること。また、それらの異常な動きに対して、障害予防につながる対処法等を受講生にフィードバックすること。

研究結果

クラシックバレエ教室の講師からは、データを取らせてもらうことに同意が得られたが、対象者の保護者による同意が得られず、断念を余儀なくされた。

【仮説】

ドゥミ・ポワントやポワント姿勢は、過剰な足関節底屈を強制されるため、足関節後方部分にストレスがかかりやすく、三角骨や距骨後面の障害（オーバーユースによる疲労骨折や骨挫傷等）が起きやすいと考えられる。また、三角骨付近の障害があると、近くに長母趾屈筋腱が通っているため、第１趾の変形または外反母趾へのはじまりになるのではないかと考えられる。

地域における
研究活動 ⑤

健康長寿を目指した声の加齢変化に対する音声治療の長期治療効果の検証

■実施日：平成31年４月１日～令和２年３月31日
■担当者：
齋藤康一郎　医学部　耳鼻咽喉科学 教授
間藤　翔悟　付属病院リハビリテーション室 言語聴覚士
渡邉　　格　医学部　耳鼻咽喉科学 助教（任期付）

背　　景

わが国は超高齢社会を迎えているが、杏林大学が貢献すべき三鷹市、そして東京都も例外ではない（日本医師会地域医療情報システム）。

この現状において「高齢者が生き生きと社会活動を行う国づくり」は喫緊の課題である。そして、高齢者が社会性を維持するためにはコミュニケーション手段の維持が必要不可欠であり、コミュニケーションの基本ツールである音声の役割は大きい。

しかし、加齢に伴い、発声器官である声帯は筋の萎縮による発声時の声門閉鎖不全を来たし、呼吸機能の低下や声帯ならびに口腔器官の湿潤低下といった変化が生じる。その結果、高齢者が発声できる声域は狭まり、雑音成分は増加し、聴力や構音能力の低下も相まってコミュニケーション能力が障害される。これがいわゆる加齢による音声障害（老人性喉頭）であり、その患者は増加の一途を辿っている。

現在、耳鼻咽喉科診療の現場では、老人性喉頭に対する治療として、保存的な音声治療と外科的な手術治療が行われている。いずれの治療法についても有効性が報告されているが、患者にとっては、手術のリスクを回避した治療で十分な治療効果を得られれば、そのメリットは大きい。

我々はこれまで、老人性喉頭の代表的な疾患である声帯萎縮に対して低侵襲な音声治療を、Vocal Function Exercise（VFE）を中心に行い、その効果を検証してきた。治療を行うなかで、音声機能および身体機能、体格指数、活動能力、個人特性（年齢、性別、既往歴、喫煙歴、病悩期間）などの多角的な因子を評価し、治療の有効性、さらには治療の予測因子に関する研究を行った。

その結果、これまでに声帯萎縮に対するVFEの有効性に加え、音声治療の有効性を予測する因子として患者の年齢や病悩期間が関与していること（間藤翔悟、齋藤康一郎、他:『音声言語医学』、59: 311-317、2018）を突き止めた。さらに患者の握力と音声治療開始前の最長発声持続時間が、音声治療の予後予測因子であること（間藤翔悟、齋藤康一郎、他:『言語聴覚研究』、16: 87-94、2019）も報告した。

研究目的

これまでの研究では、８週間の治療効果に関する検証であったが、健康長寿を目指すには、声の加齢変化に対する音声治療の効果が長期にわたって持続することが必要である。本研究では、老人性喉頭に対する音声治療の効果が、通院での治療後半年、さらに１年経過後の有効性を検証し、低侵襲な治療による地域の健康長寿への貢献を目指す。

研究内容

65歳以上の高齢者で加齢変化による音声障害を訴え、研究の意図を理解して同意を得られた患者を対象とした。

それらの患者の音声治療終了後３カ月、６カ月の時点での受診時に、主観的ならびに客観的なパラメーターの両者を測定し、治療終了時からの長期経過における音声治療効果の維持状況を検証した。具体的な検討項目としては、内視鏡検査画像に基づく声門閉鎖と、世界共通の声の自己評価（Voice Handicap Index、VHI）を用いた。

いずれも音声専門外来受診時には患者全員に対して行う検査であり、本研究のみを目的に行われる検査や侵襲は伴わない研究計画とした。

研究結果

音声治療を完遂した42名中、28名は治療後３カ月まで、21名は治療後半年までフォローアップ可能であった。検討したパラメーターである声門閉鎖と声の自己評価（VHI）は、介入前と比較して治療終了後３カ月、６カ月時点のいずれの時点でも有意に良好な改善を示した（$p<0.05$）。これらにより、声の加齢変化に対する音声治療の長期治療効果が示唆された。

〈地域活動性への寄与と今後〉

杏林大学医学部付属病院が貢献すべき三鷹エリアでも、高齢者が増加の一途を辿っていることは前述した。今回の検討では、患者に優しい低侵襲な音声治療が、加齢変化による音声障害に対して長期的に有効である可能性が示された。

今後はさらに観察期間を延長し、客観的な声質の評価や発声効率の検討を加えると同時に、患者数をさらに増やした検討が必要である。以上、本検討結果は今後の三鷹地域における高齢者の音声障害、コミュニケーション能力の改善と、地域の活性化に大きく寄与し得る可能性があることを示唆した。

地域における
研究活動 ⑥

東日本大震災による避難者に対する運動実施状況調査

■実施日：令和元年12月７日（土）、８日（日）、
令和２年１月25日（土）、26日（日）
■担当者：石井　博之　保健学部 理学療法学科 教授
相原　圭太　保健学部 理学療法学科 助教
太田ひろみ　保健学部 看護学科 教授
楠田　美奈　保健学部 看護学科 助教
戸井田千鶴　保健学部 看護学科 助教

背　景

平成23年３月11日の東日本大震災の発生は、大津波による多くの住居や生活環境の破壊をもたらした。復興庁によれば、平成31年１月の時点で岩手・福島・宮城の３県における避難者は、発生当初の47万人から5.3万人に減少している。だが、その中で今でも応急仮設住宅等に入居している者は1.4万人も存在する。

避難生活が長期化することで、今後、生活不活発病の増加が危惧される。生活不活発病に関しては、その予防、改善に対して運動が有効であるとの報告がある。

運動の開始、継続には個人の意識や動機付けだけでなく、様々な要因が影響していることが先行研究で明らかにされている。たとえば運動場所の近さ、交通の便の良さなど環境的要因や、運動する時間の有無などの背景的要因、就業や社会貢献などの社会的要因、効果の客観的評価などがある。

我々はこれまで、平成28～30年度にかけて被災地の運動実施状況調査を実施してきた。平成28年度には応急仮設住宅入居者に対する調査により、運動の実施には居住環境の違いが影響を及ぼすことを確認した。平成30年度は、応急仮設住宅から個別住宅（一般住宅や災害公営住宅など）への移動が顕著であった。そこで、平成28年度の応急仮設住宅居住時と比較することにより、運動実施率の低下に加え、運動形態が集団から個人へと変化したことを認めた。

研究目的

平成30年度の調査では、まだ移動したばかりであるため、生活環境に伴う体力や健康への影響を明確にするにはいたらなかった。今年度は、それらを明確にするために追跡調査を行う。加えて体力測定など運動機能評価を行うことで、経時的な変化を明確にする。

また、長期間に及ぶ避難生活により、健康に関する諸問題が顕在化しつつある被災者の健康問題に対し、個人因子や環境因子など多方面から問題を検討する。さらに、多くの復興支援活動がその継続性に問題を抱えており、本研究により新しい支援の方向性を模索し、より効果的な支援の道筋を検討する。

それらの結果を基に、今後の継続的かつ適切な支援を模索してきたいと考えている。

研究内容

東日本大震災による避難者に対する運動実施状況の調査を行った。

対象者は、東北においては東日本大震災による被災者で、NPO団体「AAR Japan」主催の復興支援プログラム参加者43名（平均年齢73.1歳±8.7）。東京都羽村市においては、本学と羽村市健康課及びスポーツ推進課の共催による「健康寿命延伸プログラム」参加者74名（平均年齢73.0歳±3.8）。

活動場面

計測場面

運動実施率の調査は、面接直接質問形式にてアンケート調査を実施した。また体組成計（タニタ社製インナースキャンデュアルRD-800）を使用し、BMIや体脂肪率などの測定も行った。さらに、羽村市在住の同年齢層とのBMIなど身体状況の比較も行った。

なお、調査は以下の日程で実施した。

令和元年12月７日（土）	岩手県営屋敷前アパート集会所
12月８日（日）	岩手県大槌町　和野っこハウス
令和２年１月25日（土）	福島県南相馬市かしま交流センター
１月26日（日）	福島県営北原団地集会所

研究結果

羽村市在住者と被災者の比較において、BMIの値は被災者の方が有意に高かった（ $p = .001$）。また、体脂肪率も被災者の方が有意に高かった（ $p = .001$）。

被災地での運動実施率の変化については、平成28年と平成30年及び令和２年の比較によると、運動実施率に有意な低下が認められた（ $\chi^2 = 10.60$、$df = 2$、$p = .05$）。だが、平成30年と令和２年の比較では有意な変化が認められなかった（**図１**）。このことから、仮設住宅から復興公営住宅、個別住宅へ住居形態が変化する中で、運動実施率は低下していることが示唆された。

今回の調査により、羽村市と比較して被災者の方がBMIや体脂肪率の値が高く、また運動実施率も仮設住宅から復興公営住宅や個別住宅への移動により低下していることが確認できた。このことから、栄養管理や運動実施率の向上に寄与する支援を今後充実していく必要性があると思われる。

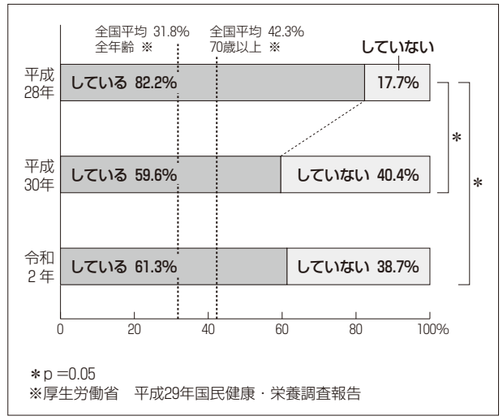


図１　運動実施状況の変化

復興公営住宅での活動場面

地域における
社会貢献活動 ①

撮って現像して アナログ白黒写真を作る

■実施日：令和元年８月９日（金）
■担当者：
山本　智朗　保健学部 診療放射線技術学科 教授
深沢　貴沙　地域交流課 課員
菱川　瑞穂　大学院 保健学研究科 院生

目　　的

デジタルカメラの普及により、銀塩フィルムカメラ（アナログカメラ）の使用は一部のマニアやそれを生業としている人だけのものになってきている。

デジタルカメラを使えば、誰でも簡単に綺麗な画像を撮影することができる。しかし、画像形成の理論的立場から考えると、カメラの基本構造は極めてアナログカメラと似ている。画像形成原理も、銀塩フィルムが半導体素子などに置き換わってはいるが、その基本原理に共通する部分は極めて多い。

診療放射線技師の養成校では、アナログフィルムの画像形成原理、現像・定着といった化学反応による処理は、教育の１つとして義務付けられている。そうしたことからも、アナログ画像形成原理を学ぶことは、フルオート化されたデジタル画像が一般的な現在でも、教育上は重要と考える。アナログ一眼レフカメラと白黒フィルムを用いて、全てマニュアル設定による撮影と、手作業による印画紙焼付から手現像処理の全てを自分で行うことで、アナログカメラによる撮影を通して化学にもより深い関心を持ってもらえるのではないかと考える。

実施内容

本学の地域交流課が、近隣市で写真部のある中学校・高等学校に本企画を打診。日程などのマッチングができた三鷹市立第一中学校の生徒５名と引率教員１名が参加し、令和元年８月９日、杏林大学井の頭キャンパス内で実施した。実施プログラムは以下の流れで行った。

①画像形成に関する講義
②アナログカメラの取扱方法説明
③現像準備の練習
④写真撮影
⑤フィルム現像処理
⑥印画紙焼付と現像処理

実施効果

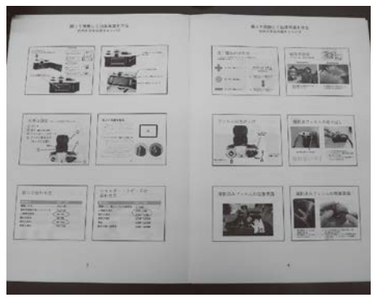
デジタルカメラが一般的であるが、化学反応のみで画像を作成できることを生徒たちに体験してもらった。彼らにとっては初めての体験であったことから、より勉強への興味がわいたと感じられた。

写真は、光の反射をレンズを通してカメラ内に取り込み、アナログフィルムでは“銀粒子”を、デジタル写真では半導体素子内で“電子”として画像の“種”を作る。その後の処理は双方で異なるが、光を利用した画像形成原理の基本は同じである。このような基本原理や特性を完全マニュアルによる操作をしながら理解することで、写真に対する知識も技量も向上すると考えられる。

今回は中学生ということで、元素記号や周期表のこともまだ学習していないため、化学反応に関する説明は十分にできなかった。しかし、現像液に浸すだけで真っ白い印画紙に画像が浮き出てくる瞬間には、誰もが驚きを隠せないようだった。

一般の学校での実施は困難であるが、このような体験が新たな興味へとつながり、知識向上の“種”になることを希望する。

完成間近のアナログ写真


講義資料

講義風景

地域における
社会貢献活動 ②

JR東日本との協働による「学生が考えた駅からハイキング」プログラムの企画・運営

■実施日：
平成31年４月１日（月）～令和元年12月31日（火）
■担当者：
志村　良浩　外国語学部 観光交流文化学科 教授

目　　的

この活動は、JR東日本八王子支社、みたか都市観光協会と本学外国語学部・志村良浩ゼミナールが協働し、地域振興･観光資源を発掘するイベントプログラムとして、「三鷹駅周辺」をテーマに「駅からハイキング」コースプログラムを企画・運営していくものである。教育活動・社会貢献活動として、三鷹市・武蔵野市の観光面での振興に寄与するとともに、学外での学びの場を学生に提供することで、コミュニケーション能力や企画力、事業運営能力を高めることを目的にしている。

なお、今年度は設定したコースが概ね武蔵野市内に集約されたことから、JR東日本八王子支社、JR三鷹駅、一般社団法人武蔵野市観光機構と連携して企画・運営することになった。

実施内容

ハイキングコースのテーマは「平和の歴史を知ろう！自然と寺社を巡る開運ハイキング」とし、太平洋戦争戦禍の歴史に触れるとともに、武蔵野七福神６寺社のうちの４寺社、自然を満喫できる公園や遊歩道など、見どころの多いコースを設定した。

具体的な活動内容・時期は以下のとおりである。

①三鷹駅周辺地域の観光資源の発掘・実踏調査（平成31年４月～令和元年５月）
②ハイキングコースの設定（令和元年６月）
③立ち寄りポイントとして想定している各種事業者との折衝・調整（令和元年６月～10月）
④パンフレット・マップの掲載内容の企画・校正（令和元年８月～10月）
⑤学生によるおもてなしアイテムの作製、受付用案内表示･装飾等の準備（令和元年９月～10月）
⑥プログラム当日の運営（受付・誘導）（令和元年11月）

「駅からハイキング」の実施期間は令和元年11月２日（土）～４日（月・振替休日）の３日間で、参加した一般市民は３日間合計で延べ1,806名。志村良浩ゼミナールからは３年生８名が参加した。

実施効果

今年度のプログラムについては、JR三鷹駅関係者との打ち合わせを重ねつつ、ゼミナール生による観光スポットのリサーチ、３回に及ぶコース候補の実踏調査、コース上の安全性の確認など、きめ細かく実施した。実施日数は３日間と短期間だったが、天候にも恵まれ、合計延べ1,806名が参加した。前年度が７日間で延べ1,366名だったことを考えると、今回のプログラムのテーマ設定と内容が参加希望者に高く訴求するものであったと言える。

今回の参加者の大半は、普段JR三鷹駅を利用しない都内および関東近県に居住する一般市民だった。武蔵野市内を横断する今回のコースは、「武蔵野七福神」として知られる寺社や太平洋戦争の戦禍、心安らげる自然と公園など、武蔵野市の魅力を体感してもらう良い機会を提供できた。三鷹駅～武蔵野市内～吉祥寺駅の地域・観光スポットの紹介により、プログラム参加者への魅力発信・地域振興に大きく貢献できたと考える。

また、学生によるおもてなしとして、周辺ガイドブック（1,900冊）と記念絵葉書（1,900枚）を作成して参加者に配布した。企画から半年間にわたって準備を進めてきたゼミナール学生に与える教育的効果は非常に高く、プロジェクトを完遂できた充足感を味わい、多くの学びを得たことで当初の活動目的は達成された。

参加者への案内風景

イベント当日の受付での集合写真

地域における
社会貢献活動 ③

鎌倉浄智寺写真供養感謝祭の企画・運営

■実施日：令和元年11月９日（土）
■担当者：
宇佐美貴浩　外国語学部 観光交流文化学科 教授

目　　的

写真供養感謝祭とは、一人ひとりの人生を語る思い出深き写真に感謝の気持ちを込めて供養することによって、新しい人生へと歩みだす手助けをする取り組みである。

鎌倉瑞泉寺で17年間続いてきたこの感謝祭は、平成26年より北鎌倉浄智寺に場所を移し、新たに開催されている。毎年11月第２土曜日に行われており、将来的には鎌倉の観光イベントとして定着させ、地域活性化を促進することを目的にしている。

実施内容

当該イベントにおいて、宇佐美ゼミナールは現地自治体との調整、ポスターやSNSによる広報活動、当日のイベント参加者への対応など、企画・運営全般を実施した。

現地自治体とは、イベントの開催場所である鎌倉浄智寺とのスケジュール調整や必要備品の手配などを行った。また、広報活動としてポスター作製および鎌倉近隣地区への配布や地域事業者へのイベントPRの協力依頼を実施した。さらに、SNSなどの媒体による動画や写真を使用した宣伝など、広報宣伝活動も実施した。

当日は高齢者の参加が多いことから、参加者の受付や案内を含め安全を第一に考えた危機管理的な対応やサポートを行い、円滑なイベント運営に寄与した。

実施効果

「地域活性化」「地域課題解決」へ寄与

当日は177人がイベントに参加した。浄智寺の自然あふれる境内で写真の御たきあげを体験し、心豊かな時間を共有することができた。また、参加者に鎌倉五山の一つである浄智寺の境内を案内し、地域の貴重な観光ツールであることを認識していただき、当該イベントが地域活性化を促す取り組みであることを理解してもらった。

杏林大学の学生がイベントを運営することによって、観光交流文化学科の存在を知らしめ、地域活性化に関する活動に貢献していることをPRすることもできた。

〈参加学生の教育的効果〉

参加した本学学生は当該活動を通して、地域振興に関するプロジェクトを成功させるための知識と技術を身に付けることができた。地域活性化には、地域の人と文化と産業が密接につながり、協力し合うことが必要であることを学んだ。さらに、普段のキャンパスとは違う現場での学びや地域自治体・企業、および地域の人々との交流は貴重な体験になった。

〈アンケート分析結果〉

参加者を年代別に見ると、ここ３年は高齢者中心から若干だが若い世代に推移してきており、若い世代にもイベントが浸透する兆しが感じられた。

参加者在住地については、鎌倉市内が約３割、鎌倉市外で神奈川県内が約５割を占めており、鎌倉周辺が大多数を占めることが分かった。

写真供養の目的としては、「遺品整理」や「気持ちの整理」が５年前の80%から15ポイント減少し、多様化の傾向を示している。

参加者がどのように当該イベントを知ったかについては、５年前と比べると、雑誌や新聞、ホームページなどの宣伝媒体を通して情報入手する人が増加してきたことが判明した。新規参加者を増やすには、そうした宣伝媒体による告知の充実などの活動を継続していくことが重要であると考えられる。

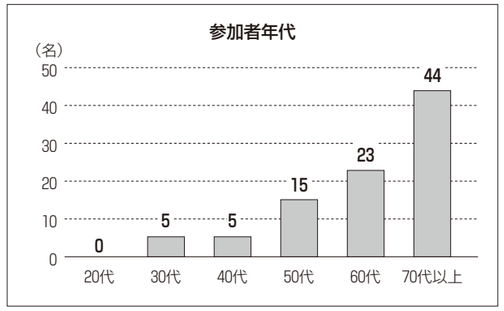


図１　参加者年代（令和元年度）　出所：筆者作成

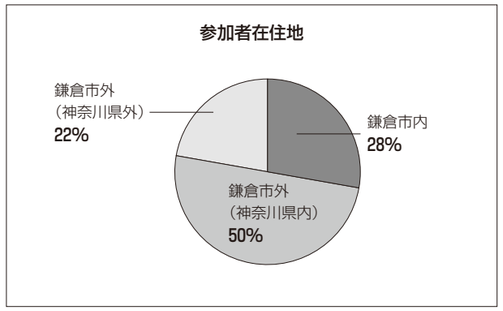


図２　参加者所在地（令和元年度）　出所：筆者作成

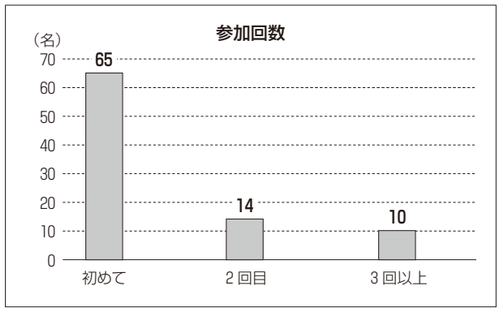


図３　参加回数（令和元年度）　出所：筆者作成

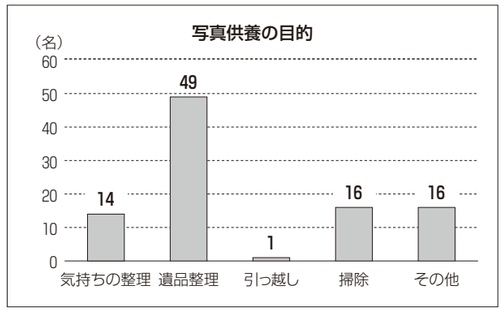


図４　参加目的（令和元年度）　出所：筆者作成

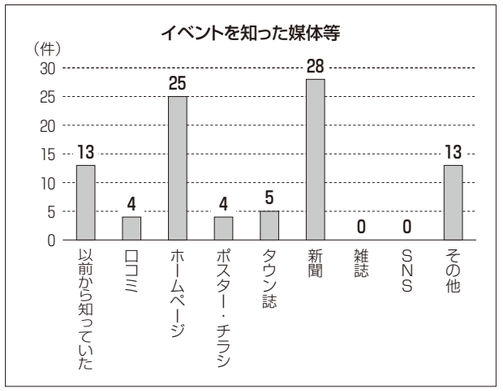


図５　当該イベントを知り得た媒体（令和元年度）　出所：筆者作成

※アンケートの総数が項目によって異なるのは、「複数回答」や「代表者の方だけ回答」があったため。

参加者との交流風景

写真供養お焚き上げ

受付の風景

地域における
社会貢献活動 ④

精神に障害がある人の配偶者・パートナーへの支援

■実施日：
令和元年 5月19日（日）、7月7日（日）、
9月7日（土）、9月22日（日）、
10月5日（土）、11月3日（日）、
令和2年 1月13日（月）、2月14日（金）
■担当者：
前田　　直　保健学部 作業療法学科 助教
谷口　恵子　東京福祉大学 講師
酒井　佳永　跡見学園女子大学 准教授（現教授）
蔭山　正子　大阪大学 准教授
横山　恵子　埼玉県立大学 教授

目　　的

本地域活動は、精神に障害がある人の配偶者･パートナーを対象としたピアミーティングを実施するとともに、障害当事者および子どもたちに対してもピアミーティングの場を設定し、家族構成員全員の健康寿命延伸を図ることを目的としている。また、一般市民を対象とした研修会を通じて、家族支援の必要性を啓発していくことも目指している。

実施内容

令和元年度は、配偶者・パートナーを対象とした「精神に障害がある人の配偶者・パートナーの集い」、障害当事者を対象とした「結婚・育児について語る当事者の集い」、小学校高学年～高校生の子どもたちを対象とした「精神に障害がある人の子どもたちの集い」を、5月19日（日）、7月7日（日）、11月3日（日）、1月13日（月）に実施した。支援に対するニーズは高く、令和元年度は配偶者・パートナー延べ111名、当事者延べ18名、子ども延べ26名が参加した。

なお、3月28日（土）に本年度最後の活動を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のための外出自粛要請が東京都から出たので中止した。

また、精神保健福祉や介護者支援に関する以下のイベントに出演し、精神障害者の家族支援に関する啓発を実施した。

①家族による家族学習会〈配偶者版〉セミナー（9月7日（土）、池袋）
②リカバリー全国フォーラム2019（9月22日（日）、池袋）
③茨木病院「家族の集い」（10月5日（土）、大阪）
④家族まるごと支援と家族のリカバリー in 沖縄（令和2年2月14日（金）、沖縄）

イベントにはそれぞれ50名～100名程度の一般市民、医療・福祉関係者、マスメディア等の参加があり、精神障害者とその家族が抱える問題と支援の必要性について議論を深めた。

なお、ともに開催予定だった3月14日（土）「家族による家族学習会担当者セミナー」（池袋）、3月21日（土）「家族まるごと支援と家族のリカバリー in 広島」は、新型コロナウイルス感染予防のため中止となった。

実施効果

本地域交流活動に参加した一般市民からは、以下のような意見・感想が得られた。

- 喧嘩しちゃいけない病気だと聞いて、今さら納得。自分のことも大事にし、一緒に生きていくのが目標、という話には励まされました。（配偶者）
- 自分がいかに頑張り過ぎていたかに気付かされた。今日のご意見を今後に生かしていきたい。（当事者）
- 今まで親と同じ双極性障害の子どもの立場という人にあまり会ったことが無かったので、とても話しやすかった。（子ども）

精神に障害を持つ人、その配偶者、子どもたちへの支援活動については、多くの参加者が満足感を示してくれた。しかし、全国的にはこうした支援の取り組みはまだまだ不足している。今後は医療機関や行政との連携を深め、支援体制を質的にも量的にも拡充していく必要があると考える。

茨木病院「家族の集い」講演

地域における
社会貢献活動 ⑤

多胎育児支援活動「ツインズマーケット」の開催

■実施日：令和2年3月7日（土）→中止
■担当者：場家美沙紀　保健学部 看護学科 学内講師
太田ひろみ　保健学部 看護学科 教授
佐々木裕子　保健学部 看護学科 教授
鈴木　朋子　保健学部 看護学科 学内講師
山内　亮子　保健学部 看護学科 学内講師

目　　的

本活動は、ふたご・みつごを育てている家族が多胎育児に関する情報や、多胎育児特有の不安や問題を解決する機会を得ること、ならびに多胎児の親同士の交流の場を提供することを目的にしている。

また、学生への教育としては、保育への参加を通して、子どもの発達を理解し、子どもや保護者との適切な相互関係を作るなど教育的課題を達成し、職業意識の明確化、自己肯定感の育成につなげることを目指している。

活動計画

今回は、昨年度開催時に参加者から要望のあった、中学生・高校生・大学生に成長した「ふたご当事者」に体験談を話していただく。また、昨年度行った「乳幼児がいる家庭用の防災セット」や「非常食アレンジレシピ」など､「防災」をテーマにした展示を拡充する。それとともに、保育中の子どもを対象に、遊びの中で防災意識を高めることができるようなゲームなどを取り入れ、子育て家庭の防災について学ぶ機会とする。

具体的には、以下の3つの活動で構成する。

①講演会
「ふたご当事者」による体験談（2組4名）　1時間程度
②多胎育児家族同士の交流の場を提供する｢フリートーク｣
多胎育児家族の関心が高いテーマ「きょうだいがいる場合の子育て」「仕事と子育ての両立」「ふたごの子育て（年齢別）」を設定し､テーマ別にグループに分かれてフリートークを行う。

参加者は周囲に多胎育児を行う家族と出会う機会が少ないことから、普段はなかなか解決できない疑問や不安をゆっくりと話してもらう時間を設ける。母親以上に父親は、ふたご・みつごを育てている人たちから話を聞く機会は少ない。そのため、本活動には父親の参加も多く、父親同士のネットワークを作る機会とする。

③展示
- 乳幼児がいる家庭の防災グッズ
- 保護者を対象とした防災に関する情報提供・パネル展示

加えて、子どもを対象とした防災に関する紙芝居やゲームなどの遊びの提供を行う。

【参加者】
- 多摩地域周辺の多胎育児を行っているご家族
  参加人数　大人100名、子ども90名程度
- 杏林大学学生ボランティア50名、教員5名

活動結果

本活動は、今回の開催で15回目となる、大学と地域が連携して行っている活動である。八王子市や三鷹市の育児支援団体、地域の多胎育児を行っている先輩保護者の協力を得て開催している。

今回のイベントには、多摩地域周辺にお住いの多胎育児を行っているご家族50組以上から参加申し込みがあったが、新型コロナウイルスの感染拡大を防止するために中止となった。

地域における
社会貢献活動 ⑥

極低出生体重児　親の会「ぴあんず」

■実施日：
令和元年５月11日（土）～令和２年２月15日（土）
■担当者：吉野　　純　保健学部 看護学科 教授
岩田　洋子　保健学部 看護学科 講師

目　　的

1800g未満の極低出生体重児は、治療の後遺症や特有の障害を抱えるケースが多く、育てる過程でさまざまな課題に直面し、親や家族は大きな困難を抱えている。

NICU・GCU退院後、家庭、地域で子育てをする中で抱える悩みや体験を共有し支援するため、本学付属病院の出生児に限らず、地域の保健センターの紹介などを含めた極低出生体重児とその家族を対象に、情報交換や学習、交流の場を提供している。

実施内容

今年度は「ぴあんず」を３回、年齢に関係なく集まれる場としての同窓会を１回開催した。各回の概要は下記のとおりである。

「ぴあんず」１回目：令和元年５月11日(土)
親３組３名、子ども２名が参加し、親の会では「フリートーク」が行われた。新学期が始まり、新しい環境に適応するのが親子ともに大変なことが語られた。保育園や学校など集団の中に入ると、他児との違いがより明確になったり、集団行動についていけなかったりと、新たな不安や心配が生じていた。

「ぴあんず」２回目：令和元年７月13日(土)
親９組12名、子ども７名が参加し、親の会では「就学前の発達支援」をテーマに児童発達支援事業すこっぷ代表・羽柴優美氏による学習会が行われた。発達障害、発達の凸凹を有する子どもたちがどんなことに困っているのか、どんな対応が必要なのかなど、具体的な内容を知ることができた。

「ぴあんず」３回目：令和２年２月15日(土)
親４組５名、子ども４名が参加し、親の会は理学療法士・土井麻莉子氏による「子どもの発達とその支援」、言語聴覚士・間藤翔悟氏による「食事の発達と支援」の学習会が行われた。少人数で子どもたちの年齢が近かったため、親同士の意見交換も活発に行われ、有意義な会になった。

同窓会：令和元年10月19日(土)
幼児６名、小学生２名、中学生４名、高校生２名とその家族が参加。「ぴあんず」に参加した思いや感想を聞くことができた。また、現在入院中など渦中にいる家族にエールを送る姿もみられた。

実施効果

同窓会は親子で過ごすスタイルとしたため、学生の保育ボランティアはなかったが、３回の「ぴあんず」を通して保育は事故なく行うことができた。年齢も小さい子が多く、おむつ替えや授乳など遊び以外にも世話をすることが多かったが、学生たちにとっては教員や看護スタッフの指導の下で初めての体験ができ、有意義な会になった。

年少児は人見知りも強く、午睡の時間に泣いている子どもをあやしたり寝かしつけを行ったりするなど、保育経験の少ない学生にとってはかなり難しい局面が多かった。泣かれてしまい、途方にくれたりパニックになったりする学生もいたが、そのような経験を通して子育ての難しさや苦労を体験することができ、より家族支援の必要性を考えるきっかけになっていた。

地域における
社会貢献活動 ⑦

「生涯スポーツの機会提供」プログラム

■実施日：平成31年４月１日～令和２年３月31日
■担当者：相原　圭太　保健学部 理学療法学科 助教
石井　博之　保健学部 理学療法学科 教授
楠田　美奈　保健学部 看護学科 助教

目　　的

本プログラムは自らの身体に関心を持ち、無理なく日常生活の中で運動を継続することで健康寿命延伸を図るための支援を目的としている。中心となるプログラムは体力測定会であり、体組成の測定、運動機能の評価を実施し、その結果の見方について解説する。また、希望者には個別の相談会を実施し、運動を実施する上での不安要素の解消を図り、半オーダーメイドの運動指導を行う。その他、羽村市が開催する健康フェアにも参加する（**下表参照**）。

実施内容

５月の「はむら健康の日」に、今年度の活動の第１回目を実施した。会場にロコモティブシンドロームのブースを設け、立ち上がりテストや開眼片脚立位時間の測定といったロコモ度チェックを行った。

６月以降は、主に羽村市スポーツセンターで体組成の測定や体力・運動機能の評価を実施した。体組成については、BMI、体脂肪率、筋肉量、基礎代謝量などの項目を測定、その場で結果をプリントアウトし参加者へ配布した。体力・運動機能の評価については、新体力テスト実施要項に基づいた測定（筋力、柔軟性、持久力、瞬発力、跳躍力、バランス機能）を実施した。その後、結果の見方について解説した。

また、希望者には個別に運動相談も実施した。生活状況や健康状態、現在抱えている整形外科的疾患などを詳細に聴取し、運動を実施する上での不安要素を解消するとともに、個々人に合わせた適切な運動内容の提案を行った。

８、９月には運動の多様性を提案する目的で、歩き方教室を開催した。基礎編では、歩行能力に関連する因子と身体機能面の加齢変化の基礎知識について、簡易バランス機能テストや姿勢をリセットする実技なども交えて講話を行った。

実技編では、ノルディックウォーキング体験会だけにとどまらず、姿勢の確認、身体のコンディショニング作り、筋力トレーニング、バランストレーニングを１つのパッケージとして提供した。

実施効果

実施頻度は昨年度と同様だが、参加者の総数は前年度を上回る結果となった。羽村市での活動は６年目を迎えるが、複数回参加している者だけでなく、いまだに新規の参加者もいることから、市民の運動に対する意識の強化や健康寿命の延伸に寄与する、地域に根差した活動になっていると考える。

しかし、参加者の多くは65歳以上の高齢者が中心で、働き盛りや子育て世代の20～40歳代の参加は依然として少ない。健康寿命の延伸には、若年のうちから自身の健康に関するセルフマネジメントや運動習慣の獲得が必要不可欠であるため、いかにそれらの世代を取り込んでいけるかが今後の課題である。

ウォーキングのセミナー (座学)

表　令和元年度活動実績

月日	参加者（人）	教員（人）	学生（人）	活動実施場所	備　　考
５月19日（日）	51	2	1	羽村市保健センター	はむら健康の日
６月１日（土）	29	2	2	羽村市スポーツセンター	体力測定会・運動相談会
８月24日（土）	16	2	7	羽村市スポーツセンター	体力測定会・運動相談会
８月31日（土）	33	1	0	羽村市スポーツセンター	歩き方教室―基礎編―
９月23日（月）	34	1	0	羽村市スポーツセンター	歩き方教室―実技編―
12月21日（土）	23	2	5	羽村市スポーツセンター	体力測定会・運動相談会
２月８日（土）	13	2	3	羽村市保健センター	体力測定会・運動相談会

体組成の測定

体力測定（障害物歩行）

地域における
社会貢献活動 ⑧

性の多様性を取り入れた「いのちのおはなし会」実践の試み

■実施日：令和元年５月１日～令和２年３月31日
■担当者：佐々木裕子　保健学部 看護学科 教授
　　鈴木　朋子　保健学部 看護学科 学内講師

目　　的

幼い子どもたちへの性犯罪やいじめ、自殺など命を軽視した事件が社会問題化している。周りの大人たちが命や性について正しい知識とスキルを持ち、子どもたちを育むことが重要である。

学生主体のボランティア活動「いのちのおはなし会」（以下、「おはなし会」）はこれまで、命の大切さを伝えるとともに、子どもたちが自分の体を知りプライベートゾーンを守ることができること、保護者や保育士が子どもたちの体や性の疑問に向き合うことを目的に活動を続けてきた。しかし近年、男女の性にとらわれない多様な性のあり方が問われており、幼児期の子どもたちへの対応についても検討が必要である。

そこで、あらためて以下の３点を活動の目的とした。

①子どもたちが命の大切さを知り、自分や周りの友達を大切にできる
②子どもたちが男女の体の違い、こころの性・体の性の多様性を理解できる
③周りの大人たちが子どもからの身体や性に関する質問に向き合い教育的関わりを考える機会となる

実施内容

令和元年度は、三鷹市と近郊の保育園の園児（４～５歳児）とその保護者、保育士を対象に「おはなし会」を計３回実施した。３園の参加者は、４～５歳児98名、保護者９名、保育士12名だった。学生は延べ13名（保健学部９名、医学部４名）、このほか医学部医学教育学教員１名が参加した。「おはなし会」では、保健学部の学生（４～５名）によるパネルシアター（いのちの誕生、出産、男女の体のちがい、プライベートゾーンの大切さ、多様な性の理解）、エプロンシアターを用いた保育園訪問型活動を行った。

実施効果

今年度は、自分の性を認識し始める４～５歳の時期から男女の性にとらわれない多様な性の理解につながる内容をシナリオに加えるため、保健学部１年生のおはなし会新規メンバーと勉強会を重ね検討。性＝こころの多様性を虹色のハートで表現する工夫を行った。そして、“人は皆それぞれこころの色が違うこと”、“友達と好きなものや好きな人が違っていてもよいこと”に加えて、自分とは違う友だちの“からだとこころを大切にしよう”を、三つ目のメッセージにした。

実際には新型コロナウイルス感染拡大の影響から令和元年度に計画していた２月（保育園７園、幼稚園１園）の「おはなし会」が中止となり、新しいシナリオでの実践はできなかった。次年度以降、新しいシナリオで「おはなし会」を重ね、子どもたちや保護者の反応から子どもたちの個性を大切にした効果を検討していきたい。

また、今年度は医学部１年生の地域体験学習の一環として「おはなし会」も実施された。男子学生３名、女子学生１名で行った会もあったが、子どもたちの反応は従来と変わらず、「おはなし会」のメッセージは実施する側の性差に関わらず子どもたちに届くことが確認できた。

おかあさんが頑張って、そしてみんなが頑張ってうまれたんだよ

この小さな点がいのちの始まりの大きさだよ

地域における
社会貢献活動 ⑨

災害に備えるまちづくり BLS指導を通した実践的な災害対応力の向上

■実施日：令和元年６月14日（金）、６月28日（金）、
　　７月９日（火）、７月12日（金）、
　　11月４日（月）、11月24日（日）、
　　令和２年２月７日（金）
■担当者：千田　晋治　保健学部 救急救命学科 特任教授
　　井上　孝隆　保健学部 救急救命学科 准教授
　　阿部　和巳　保健学部 救急救命学科 特任准教授
　　滝沢　文彦　保健学部 救急救命学科 特任准教授
　　小菅　真昭　保健学部 救急救命学科 特任講師
　　下田　　勲　保健学部 救急救命学科 特任講師
　　佐藤　　宏　保健学部 救急救命学科 特任講師
　　久保利勝治　保健学部 救急救命学科 特任講師
　　神山麻由子　保健学部 救急救命学科 助教
　　久保佑美子　保健学部 救急救命学科 助教
　　上崎　梢子　保健学部 救急救命学科 助教

目　　的

救急救命学科では、学科生徒全員に「応急手当普及員」の資格を取得させ、地域の中学校や住民への指導が行えるように学内教育を推進している。その成果を活かすと同時に、指導技能の向上を図り、さらに本学の社会貢献活動に対する地域住民の理解を促進することが目的である。

実施内容

羽村市立中学校３校でのBLS指導

令和元年６月14日（金）、羽村市立羽村第一、第二、第三中学校の生徒415名に対し、学生47名と教員11名がBLS（Basic Life Supportの略、一次救命処置）指導を実施。

三鷹市立中学校４校でのBLS指導

①令和元年６月28日（金）、三鷹市立第五中学校１年生122名に対し、三鷹消防署と合同で学生10名と教員１名が実施。
②令和元年７月９日（火）、三鷹市立第四中学校１年生115名に対し、三鷹消防署と合同で学生11名と教員１名が実施。
③令和元年７月12日（金）、三鷹市立第一中学校１年生236名に対し、三鷹消防署と合同で学生６名と教員１名が実施。
④令和２年２月７日（金）、三鷹市立第六中学校１年生158名に対し、三鷹消防署と合同で学生12名と教員１名が実施。

三鷹市主催の防災訓練への参加

令和元年11月４日（月）、三鷹市立第二中学校で実施された「三鷹市総合防災訓練」に参加し、1,200名の参加者に対し、学生16名と教員３名がBLS指導を実施。

駅伝大会における救護活動

令和元年11月24日（日）、第28回三鷹市民駅伝大会（207チーム参加）の開催に伴い、本部、中継所の救護担当として学生10名と教員５名が参加し、応急救護を担当した。

なお本大会と併せて４～５歳児40名、小学１～２年生46名を対象に「走りっこ教室」が開催され、この会場での応急救護も担当した。

実施効果

「災害に備えるまちづくり」を目的としたBLS指導、救護活動などの取り組みにより、学生の社会貢献への意識向上が図られた。また、実践的な指導を行うことで、救急救命士の資格を活かした職業に就いた際に求められる救命技術の向上に結び付いていると考えられる。さらに、学生がさまざまな年齢層の市民と接することでコミュニケーション力が向上している。

BLS指導については、三鷹消防署と連携しながら充実した講座を行うことができた。学生にとっては能力向上の良い機会となった。

過去最多のチームが参加した第28回三鷹市民駅伝大会では、大きな事故や、けが人、急病人などの発生はなかった。参加者の安全が確保され、駅伝大会成功の一助となったことは、地域に密着した社会貢献活動となった。

救急救命学科学生による訓練指導

中学校でのBLS指導

駅伝に参加したメンバー

地域における
社会貢献活動 ⑩

発達障がいの子どもとその家族を対象にした「きらめきハッピーキャンプ」

■実施日：令和元年７月13日（土）、
８月10日（土）、11日（日）
■担当者：太田ひろみ　保健学部 看護学科 教授
楠田　美奈　保健学部 看護学科 助教
場家美沙紀　保健学部 看護学科 学内講師
戸井田千鶴　保健学部 看護学科 助教
東宮　繁人　保健学部 健康福祉学科 助教
江頭　説子　医学部 講師
佐々木裕子　保健学部 看護学科 教授
赤嶺　恵理　外国語学部　講師

目　的

発達障がい児たちが、円滑な対人関係を形成し、豊かな社会生活を送れるようにするためには、人間関係を育てる交流を経験することで社会性を養うことが重要である。

なかでも野外体験活動は、発達障がい児にとって「仲間と共に課題を達成していく中で積極性や主体性を発揮できるようになる」「成功体験を積むことにより、活動全体に対する意欲が高まる」といった効果が期待される。

そこで、地域の発達障がい児と家族を対象に、発達障がい児の円滑な余暇活動支援を行うことを目的とした「きらめきハッピーキャンプ」を企画・実施した。

また、同時に本活動は、学生が、発達障がい児を取り巻く保護者や地域の支援団体との交流を通して、地域コミュニティへの貢献や発達障がい児に対する理解を深めていくことを目指している。

実施内容

発達障がい児とその家族、ボランティア学生が一組となり、①ワンデイレクリエーション、②１泊２日「きらめきハッピーキャンプ」を実施した。

①**ワンデイレクリエーション**：令和元年７月13日（土）
キャンプに参加する子どもたちと学生の「顔合わせの会」として実施。共に時間を過ごすことで親睦を図り、初対面の人に対する子どもたちの緊張感を軽減し、キャンプ当日に子どもたちが安心して参加できるようにすることを目的とした。

②**野外活動「きらめきハッピーキャンプ」**：令和元年８月10日（土）、11日（日）
埼玉県秩父郡小鹿野町において実施。参加者は、子ども17名（５歳～13歳）、保護者16名、学生30名、地域支援者４名、教員５名の合計72名。

活動内容は川遊び、ものづくり、夜のお楽しみ会、学生と保護者の情報交換会、保護者対象のヘルスチェックなど。学生は、子どもたちと一緒に行動しながら、日常生活全般と遊びのサポート、レクリエーションの企画・運営、保護者交流会への参加などに携わった。

実施効果

保護者からは「ワンデイレクリエーションにより、子どもが担当学生と面識が持てたので、スムーズに当日を迎えることができた」「名前を呼ばれ大事にされると、子どもは沢山の自信とパワーをもらえる」「他の保護者とお話しができたことは癒やしであり、勉強にもなった」などの感想があった。

学生は「保護者の思い、支援してほしいポイントを知ることができた」「先入観で接するのではなく、一人の子どもとしてその子をみることが最も重要だと実感した」「周囲に理解がある人がいれば、発達障がいの子どもたちが自分のペースでのびのびと楽しむことができることが分かった」などの学びがあった。

「きらめきハッピーキャンプ」参加者

ハッピーキャンプのものづくり活動

地域における
社会貢献活動 ⑪

自閉スペクトラム症を中心とする障害児者が行うピアノ・電子オルガンの演奏会

■実施日：令和元年９月23日（月）
■担当者：中島　　亨　保健学部 臨床心理学科 教授
櫻井　未央　保健学部 臨床心理学科 講師

目　的

音楽療育鍵盤指導研究ネットワーク（音育）は音楽指導研究を目的とした団体で、「音楽指導者による、障害を持った人に対する、医療に大きく依存しない音楽指導」の活動を平成10年から約21年間続けている。音育の理想は、「多くの指導者が障害児者に音楽を素朴に指導できる環境を実現する」ことであり、「障害をもった人は、受け入れ先がなく音楽を楽しむことを断念せざるを得ない」という好ましくない状況にならないよう、音楽指導の方法や工夫、指導によってみられた変化などを研究している。

音育は２年に１回、障害児者自身が演奏をする演奏会を開催している。当日の演奏や演奏会に向けた練習を通じて、障害児者の自尊感情を向上させることが目的で、レッスンの順序などに対する同一性保持の状態から脱却できた例もある。また、非言語的なコミュニケーションである音楽は、言語的な発達の遅れを伴う自閉スペクトラム症などの障害児者のコミュニケーション手段として有用とも考えられる。

実施内容

１. 演奏会概要

「第10回音楽仲間はハートフル」は令和元年９月23日（月）、渋谷区文化総合センター大和田・伝承ホールで、約150名が参加して開催された。内容は、小学生から壮年までと幅広い年齢層の障害児者による楽器のソロおよびアンサンブル演奏である。

２. 演奏者の特徴と指導方法

演奏者は、自閉スペクトラム症をはじめとする障害児者である。そのレッスンには時間がかかり、特に多動を伴っている例などでは、イスに座ってレッスンを受けられるようになるまでに数年を要することもある。一方、ダウン症児者は共感性に富みほぼ問題なくレッスンが可能となることも多い。このような特徴を一人ずつ把握し、それに合わせるような形で指導を行ってきた。

また、「演奏会で演奏する以上は絶対に失敗させない」ことを念頭に置いているが、時には「自分の努力に見合わない演奏になる」「演奏時に止まってしまう」などの事態も起こり得ると考えられる。会場の出席者が応援してくれているため、いままでに大きな問題が起こったことはないが、将来的にも気を付けていきたい点であると言える。

実施効果

今回の演奏会会場は初めて使用したこともあり、やや不安な状態でのスタートだったが、これまでの演奏会よりも非常にスムーズに進行した。「ホールの大きさや楽器の質が影響してうまく進行したのではないか」との声もあったが、指導者の熱意や演奏者の努力が結実したものと思われる。

自閉スペクトラム症では、患児の見守りを怠るとしばしば「行方不明になる」ことがある。だが、今回は「（本学学生に）滞りなく警備をしていただいたおかげで、安心してコンサートが開催できた」と主催者から高評価を頂戴した。

演奏者、演奏者のご家族からは「大きなピアノで弾けてすごく楽しかった」「客席と楽屋の間は迷路のようでしたが、スタッフの方が案内してくださったので、不安なく行き来できました」などの意見をいただいた。多くの演奏者にとって、自尊感情の向上につながったようである。

次回の演奏会は２年後になるが、障害児者が楽器を楽しんで演奏し、自尊感情を向上させるとともに、演奏のスキルも獲得する、という視点を保ちつつ演奏会を開催していきたいと考える。

「演奏会」を紹介するポスター

コンサートのフィナーレ

地域における
社会貢献活動 ⑫

三鷹市における健幸教室および体力測定会の開催

■実施日：令和元年７月６日（土）
10月26日（土）
12月14日（土）
令和２年２月15日（土）
■担当者：榎本　雪絵　保健学部 理学療法学科 准教授
辻　　謙作　体笑会

目　　的

この活動の目的は、三鷹市在住の高齢者を対象に「健幸教室」を開催し、参加者の健康増進と健康寿命の延伸を図るとともに、参加者間や学生ボランティア、看護師らとの社会交流を促進することである。

実施内容

「健幸教室」は、同市の自主グループ「体笑会」の運営補助を得ながら、平成28年度から継続して開催している。参加者は、三鷹市の広報紙で毎回公募し選定している。

今年度も４回、本学井の頭キャンパスで開催。概要は下記のとおりである。

第１回　令和元年７月６日、参加者30名、理学療法学科学生ボランティア25名、看護師１名、日本女子体育大学教員１名と学生３名

第２回　令和元年10月26日、参加者23名、学生ボランティア９名、看護師１名、日本女子体育大学教員１名と学生１名

第３回　令和元年12月14日、参加者31名、学生ボランティア12名、看護師１名、日本女子体育大学教員１名

第４回　令和２年２月15日、参加者40名　学生ボランティア10名、看護師１名、日本女子体育大学教員１名

各回とも、体調チェック票による問診とバイタル測定を行い参加の可否を判断した後、運動介入前後の体力測定、ストレッチを中心とした90分程度の運動介入（休憩を含む）を行った。

運動プログラムは、「猫背を治そう！」「立位バランスを改善しよう！」などと毎回テーマを変えて実践。また、自宅でもできるようにパンフレットを作成・配布し、運動習慣化の促進に努めた。

この教室には、地域住民との協働や社会交流を促進するため、理学療法学科の学生や近隣クリニックの看護師がボランティアとして参加した。学生ボランティアは参加者への運動指導やバイタル測定、体力測定などを担当し、運動の実践における対応や指導なども行った。骨粗鬆症コーディネーターの資格を持つ看護師は「骨粗鬆症についてのミニ講座」を開催し、健康教室参加の意義や実践効果をより明確に示した。

さらに、今年度からは日本女子体育大学の教員と学生もボランティアとして参加した。

実施効果

参加者の中には、学生との交流や運動支援を望んで教室に繰り返し参加する人も多く、学生と参加者間の他世代交流ばかりでなく、参加者間の交流の機会にもなっているようである。

理学療法学科の学生からは「地域理学療法の実践の機会となり『有意義だった』」との声があった。また、これまで理学療法学科の学生ボランティアは総合臨床実習前の第３学年が主だったが、今年度から１、２学年からも希望者を募り、早期から理学療法士としての役割と意義を明確に示すとともに、この活動を通して第３学年との交流、先輩からの指導を受けられる良い機会になった。

看護師の参加により、健康相談や必要に応じた医療機関との連携も促された。また、日本女子体育大学の教員と学生ボランティアが参加したことは、他大学との協働などの点で今後の活動を検討する機会となった。

体力測定

学生ボランティアによる運動指導

地域における
社会貢献活動 ⑬

要介護高齢者への「アクティビティ・トイ」を用いた活動支援

■実施日：令和元年11月14日（木）、11月21日（木）、12月12日（木）、
令和２年１月30日（木）、２月15日（土）、２月17日（月）
■担当者：
齋藤　利恵　保健学部 作業療法学科 学内講師
八並　光信　保健学部 理学療法学科 教授
丸山　和代　特別養護老人ホーム 愛全園 施設長
佐久間大輝　付属病院リハビリテーション室 作業療法士

目　　的

要介護高齢者の施設において、特に認知症の診断を受けている利用者は自発的に活動することが難しく、対人交流する時間も減少していく。こうした中で作業療法士は、ICF（国際生活機能分類）を用いて評価を行い、施設利用者の健康状態およびQOLを高め、活動への参加を促すための治療を行っている。

「アクティビティ・トイ」とは、手・足の運動機能のみならず、認知機能･癒やし･五感の刺激、コミュニケーションの活発化など、要介護高齢者のさまざまな状況に合わせて活動を促すことができる、治療用の「おもちゃ」である。

本活動は「アクティビティ･トイ」を用いた活動を通して、要介護高齢者に対しては、①運動機能の向上、②認知・心理機能の賦活、③コミュニケーション能力の賦活を、学生には要介護高齢者への理解を深めることを目的としている。

実施内容

令和元年11月14日から令和２年２月17日の間、東京都昭島市の社会福祉法人同胞会特別養護老人ホーム愛全園で計６回、「アクティビティ・トイ」を用いた集団活動と個別活動を実施した。参加した要介護高齢者は各日10名（合計60名）。

■集団活動

（参加人数10名程度、要介護高齢者３名に対し学生１人）

かえるジャンプ、KAPLA（カプラ）、ステッキなどを個人戦やグループ対抗戦で行った。実施時間は40～60分で、各対象者の認知面の評価によって実施する「アクティビティ・トイ」の難易度を決定した。

■個別活動

（参加人数は最大６名､要介護高齢者１名に対し学生１人）

主に難聴者やコミュニケーションを苦手とする人が参加した。ステッキは学生と要介護高齢者が１対１で対戦。KAPLAは、積み木を積み上げる目標段数を決めて、学生と要介護高齢者が目標達成のために協力し合う内容で実施した。実施時間は10～40分。

■活動への参加意欲の評価

要介護高齢者が課題遂行に対して意欲的に取り組んでいるかを客観的に評価するため、VQ（意志質問紙：観察評価可能）を実施し、作業や活動の取り組み度、集中度合いを観察し評価した。

実施効果

活動をとおして「周囲の人との会話量が増加した」「個別活動から集団活動へ移行できるようになった」など、社会性の再構築につながった要介護高齢者が多く見られた。また、機能訓練を拒否しがちな参加者が立位で活動に取り組み、立位保持時間が延長するという効果も見られた。

また、「回が進むにつれて自発的に参加する人が増え、協力的に周囲とコミュニケーションをとる場面も見られた」というVQでの評価が得られた。

学生からは「思っていた以上に要介護高齢者は活動的だった」「アクティビティ・トイを通した関わりだと緊張しなかった」などという声があった。また、アクティビティ・トイを用いて要介護高齢者と関わることで、「説明を工夫しなければならない」などコミュニケーションをとるための具体的な課題に気づくきっかけにもなっていた。

「アクティビティ・トイ」を用いた活動は、要介護高齢者と学生の双方が共通の課題達成に向けて時間や楽しみを共有でき、世代間交流へとつながった。また、要介護高齢者の身体面・認知面に関わらず、社会性へ働きかけることができ、治療ツールになると考えられた。

今後は、「アクティビティ・トイ」を用いた活動の生活機能の三つのレベル（心身機能、活動、参加）への効果について検証していきたい。

アクティビティ･トイ「KAPLA」を使った活動

活動風景

地域における
社会貢献活動 ⑭

大学と市民の協働による防災啓発活動「みたか防災マルシェ」

■実施日：
令和元年６月１日（土）～令和２年３月８日（日）
■担当者：
大木　幸子　保健学部　看護学科　教授
藤井　広美　保健学部　看護学科　准教授
加藤　昌代　保健学部　看護学科　学内講師
小松　実弥　保健学部　看護学科　助教
山崎　　光　防災団体 やろうよ! こどもぼうさい 代表

目　　的

地域の防災対策へ寄与するため、みたか防災マルシェ実行委員会との協働で市民向け防災啓発活動「みたか防災マルシェ2020」の開催を企画した。

開催目的は次の３点である。

1．楽しみながら防災を考えることで、防災に対する他人事意識、マイナスイメージを払拭し、防災について考える機会とする
2．市民に対し「個々人の自助」とともに「地域での共助」のための備えの必要性を伝え、日常の防災意識を啓発する
3．三鷹中央通り商店街と住民を「防災」というキーワードでつなぎ、災害時のストックヤードである商店の活性化を図る

本研究室は、特に「乳幼児を持つ親子への防災情報の発信」および「災害時の障がいがある人の困難への市民の理解」を重点においた企画の運営を担い、準備を進めた。

実施内容

「みたか防災マルシェ2020」は令和２年３月８日（日）に三鷹駅南口の中央通り商店会をメイン会場に実施予定だったが、新型コロナウイルス感染症の流行状況を鑑み、２月の実行委員会で中止が決定した。

計画した活動と中止が決定するまでの活動状況は下記のとおりである。なお、本活動には、本学科看護学専攻の学生30名がボランティアとして参加予定であった。

①実行委員会に構成団体として参加

６月から「みたか防災マルシェ」実行委員会に構成メンバーとして参加し、イベント全体の企画・準備を行った。

②親子向け体験型防災ブースの企画・運営

「親子で楽しみながら防災について考える」機会になるように、防災キャラクターグッズの作成や非常用トイレ体験、子ども防災検定、ガラスの破片体験（卵の殻の上を歩いてみよう！）などの体験型ブースを企画。本学学生にボランティアとしての参加を呼びかけ、準備を行った。

③防災講話リレーの企画・運営

さまざまな立場の講師による「防災に関するリレー講話」を企画。「多様な人々の生命を守る防災の街」をテーマに６つの枠を予定し、講師との調整・準備を行った。

④三鷹市内の防災に関する卒業研究の発表

本学科看護学専攻地域看護学研究室ゼミ生による『三鷹市内での防災に関するフィールド研究』（卒業研究）の研究発表の実施にむけた準備を行った。

実施効果

本活動は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、残念ながら直前になって中止となった。

しかし、みたか防災マルシェ実行委員会へ参加した経験や、研究室での活動準備などをとおして、三鷹市中央通り商店会や防災活動を担う多様な組織・団体・キーパーソンと大学とのネットワーク構築の契機となった。また、学生へのボランティア協力の呼びかけ、準備会の開催を通して、学生の防災意識醸成の機会となった。

20人が参加した２年生ボランティア学生向け準備・学習会の様子（令和２年 １月28日、三鷹キャンパス）

新聞紙スリッパ作成練習

ビニール袋雨合羽作成練習

地域における
社会貢献活動 ⑮

花でとりもつ地域の『輪（和）』

■実施日：令和元年９月22日（日）、
令和元年12月25日（水）～
令和２年１月４日（土）
■担当者：
楠田　美奈　保健学部　看護学科　助教
木村　尚未　華道家元池坊中央委員　副総華督

目　　的

学生が「花を通じて地域の人々との交流を図ること」が、この活動の大きな目的である。

具体的には、以下の３点を目標に活動を行った。

①地域の高齢者と花を通じた交流を図ること。
②地域のありとあらゆる年代の方に、華道という日本の伝統文化を紹介すること。
③花を通して、命の大切さを伝えること。

実施内容

1. 高齢者施設での華道を楽しむ会

実施日：令和元年９月22日（日）
実施場所：本学近隣の高齢者施設
対象者人数：５名、本学参加者：６名

井の頭キャンパス移転後から続けている活動で、学生が高齢者とマンツーマンで作品制作に取り組んだ。

2. 花と迎える年末年始

実施日：令和元年12月25日（水）～令和２年１月４日（土）
実施場所：本学八王子キャンパス、JR三鷹駅内「アトレヴィ三鷹」
本学参加者：10名

10月初旬に華道部幹部らが、アトレヴィ三鷹の担当者様へプレゼンテーションを実施した。学生は「自分たちがどんな作品を生けたいのか」を伝えることの難しさに直面していた。また、先方からは作品イメージやサイズの制限などについて要望が寄せられた。学生は知恵を駆使し、お互いの意見を取り入れた作品の制作に向けて、工夫を凝らして計画を立てた。

展示日前日には、昨年度同様に本学八王子キャンパスで竹を採取。ナタやノコギリを使って青竹を割り、節の間を電動ドリルでくり抜くなど、展示用の花器としてスタンドなどを制作した。

展示期間初日は、先方から要望があった「赤のイメージ」に沿うように、赤の緋毛氈の上に青竹を用いた２種類の作品を展示した。駅利用者に作品制作の過程を見てもらう「公開生けこみ」も実施した。

実施効果

華道を楽しむ会では、高齢者の方が、作品制作中だけでなく仕上がってからも「お花はいつから習っているの? 大学ではどんな勉強をしているの?」など、学生と積極的に会話を楽しむ姿も見られた。

学生からは「自分の祖父母よりも高齢な方との会話が初めてで、どうやってコミュニケーションを取れば良いのか不安だった。でも、いろんな話をさせてもらい、とても楽しかった」「ここでの会話は、病院実習で患者さんと話をするときに生かせそうです」などの感想があった。

年末年始の花の展示では、部員が協力して作品を作り、管理も行った。また、改札フロアにも、作品を展示したことで「杏林大学華道部の作品を見ました」と駅利用の方から声を直接聞くこともできた。

いずれの活動も、花を通して地域の人と関わることができ、学生にとっては貴重な経験であったと示唆される。

また、今回は、卒業生の菱山まりこ氏（元社会科学部卒）のご協力により、八王子近隣の花農家の皆さまから花材の提供もあり、地域の皆さまに支えられた活動となった。

高齢者施設での華道を楽しむ会
（①作品制作中の様子　②出来上がった作品）

花と迎える年末年始
（③慣れないノコギリを使い花器作成に奮闘　④⑤アトレヴィ三鷹での展示）

地域における
社会貢献活動 ⑯

地域活性化の理論と実践の「みたか知り隊ウォーク」

■実施日：令和元年11月９日（土）
■担当者：井上　晶子　地域交流推進室　特任講師
　　古本　泰之　地域交流推進室　室長
　　井手　拓郎　外国語学部　准教授

目　　的

平成31（令和元）年度「高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム」（地域活性化の理論と実践）特別講座Bでは、基礎知識・技術等に関する学びを実践に活かすために、受講生が自ら企画した「みたか知り隊ウォーク」を実践した。

受講生が主体となった企画、交渉、実践、結果評価までの一連のプロセスを通して、今後の地域活動に求められるコーディネーターとしての資質を身につけることを授業の狙いとした。

そして、この活動の大きな目的は、三鷹の地域資源を活かした交流人口の増加を図り地域の活性を促すことにある。と同時に、受講生の目標は、地域・近隣住民に三鷹の魅力を伝えることで三鷹への愛着を深めることである。

実施内容

「みたか知り隊ウォーク」は、受講生の主体性、自立性に基づき、三鷹市の将来課題を見据えて農業関係者や福祉関係者と連携を行うとともに、行政関係者、観光関連組織の方々の参加と協力を得て実施された。

受講生はそれぞれの得意分野に応じた役割を分担する一方、この活動に関心を持つ学部生も参加して役割を担った。

これまでの活動実績を踏まえ、６月から11月まで行った活動は、さらなる充実を目指した。各月４回以上の自主的な集まりに加え、各役割（スケジュール作成、MAP作成、各体験のための交渉、食事や記念グッズの手配など）を果たすために個人単位でも活動が行われた。

実施内容は、ウォーキング（新川・中原地区の自然と歴史探訪、ガイドは受講生が分担）、体験（果樹園での摘み取り体験、農業祭参加）、交流会（受講生進行による農家青年・果樹園経営者・福祉施設職と参加者の交流）などである。

参加者は、一般参加者19名、受講生10名、学部生３名、地域交流課１名、教員２名、計35名だった。

実施効果

一般参加者に対するアンケートによると、総合的な評価では85%の参加者が「満足」と答え、口コミが期待される「親しい友人に勧めたい」が84%と、満足度が非常に高い結果となった。

個別項目において特に満足度が高かったのは、主催者によるゲスト対応と三鷹産のお土産だった。ゲスト対応に満足度が高かったことは、受講生の緻密な計画、きめ細かな配慮、参加者個々人に合わせた対応などが評価されたものと考えられ、大きな成果である。

また、三鷹産のお土産への評価は、参加者の多くが三鷹市の住民であることから、いかに住民が自分の住む地域のことを知らなかったかが明らかになったと同時に、今回のツアーによって目標の一つであった三鷹への地域愛が醸成されたことを示唆するものと考える。

企画会議

「みたか知り隊」集合写真

果樹園での摘み取り体験

「第８回杏林CCRCフォーラム 地域交流活動 抄録集」を作成

令和２年２月29日(土)に予定されていた「第８回杏林CCRCフォーラム」で、令和元年度の諸活動の成果報告を行う予定だったが、新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて開催が延期された。それにともない、研究活動、社会貢献活動の成果を公開する場として、一部の活動報告をまとめた抄録集を作成、発行した。

杏林大学　杏林CCRC研究所
所長 長島文夫

抄録集の公開にあたり（一部略）

杏林大学では、平成25年に「包括的地域連携を推進する拠点」として杏林CCRC研究所を設置して以降、地域社会が抱える多種多様な課題の解決に取り組むべく、教育・研究資源を活用して様々な研究活動、社会貢献活動を行っております。

新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、「第８回杏林CCRCフォーラム」が延期され、本年度の研究活動、社会貢献活動の成果を公開する場として、一部の活動報告をまとめた抄録集を作成することとしました。

事態が収束し、来場者の安全が確保出来るまで、フォーラムの開催は先延ばしとなりますが、実施に向けて教職員一同真摯に取り組んで参りますので、ご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

令和２年３月30日

その他の地域交流活動

種別	No.	行 事 ／ 活 動 名	実施期間	活動主体
教育	1	三鷹医師会検診委員会研究	４月１日(月)～ 令和２年３月31日(火)	医学部
	2	―学部授業の科目提供― 「国際経済学A」「日本の貿易政策」「環境政策論」を大学コンソーシアム単位互換制度へ提供。	４月～７月	総合政策学部
		「国際経済学A」をアドバンスト･プレイスメント対象科目へ提供。 「環境政策論」を「高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム」対象科目へ提供。	９月～令和２年１月	
	3	小平医師会学術講演会	４月18日(木)	医学部
	4	「令和早々･春の陣 本格派のためのBNCコーパス入門 ―辞書執筆者がそっと教える英語学習虎の巻―」〈講演〉	５月８日(水)	外国語学部
	5	「『商標言語学』―商標の類似性判断における音韻論及び認知言語学的アプローチ―」 （五所万実・慶應義塾大学［院］）ほか〈企画・運営〉	５月19日(日)	外国語学部
	6	IPF Academy in TOYOTA	５月22日(水)	医学部
	7	羽村市立羽村第一・第二・第三中学校２年生に一次救命処置について 講義及び実技の授業	６月14日(金)	保健学部
	8	「メディアと言語学習―『おもてなし』時代の英語学習を例として」 （2019年度総会記念講演、井上逸兵・慶應義塾大学）〈企画・運営・司会〉	６月15日(土)	外国語学部
	9	「夫婦の会話を科学する～不満解消の秘訣は!? ～」〈監修・解説〉	６月25日(火)	外国語学部
	10	第31回・32回　三鷹・武蔵野・小金井　排尿障害勉強会	６月29日(土)、 11月30日(土)	医学部
	11	多摩泌尿器科医会（第146、147、148回） ７月５日（146回）、11月15日（147回）、令和２年１月31日（148回）	７月５日(金)～ 令和２年１月31日(金)	医学部
	12	看護師・コメディカルのためのFIM講習会	７月14日(日)、 12月８日(日)	保健学部
	13	「前置詞の習得段階における発話の単位―前置詞句単独発話の産出について―」 （堀内ふみ野・大東文化大学）ほか〈企画・運営〉	７月21日(日)	外国語学部
	14	Respiratory Conference in 愛媛	７月24日(水)	医学部
	15	多摩地区呼吸器セミナー	７月25日(木)	医学部

種別	No.	行 事 ／ 活 動 名	実施期間	活動主体
教育	16	「英和辞書とコーパス」〈監修〉	7月26日(金)～ 8月31日(土)	外国語学部
	17	「ある外交官OBのつぶやき①―アニミズムからバチカンまで」 (上野景文・元駐バチカン大使)〈企画・運営・司会〉	7月27日(土)	外国語学部
	18	夏！体験ボランティア2019 in みたか	8月19日(月)～ 8月23日(金)	医学部付属病院
	19	専門性向上研修 小学校外国語大学連携・英語教育中核教員養成講座（Basic）	8月19日(月)～ 8月20日(火)	外国語学部
	20	Severe Asthma management Seminar	8月31日(土)	医学部
	21	第20回皮膚合同カンファレンス	9月28日(土)	医学部
	22	感染症対策～今すぐできる予防と実践～	9月30日(月)	医学部
	23	「コンストラクションセマシオロジーの構築に向けて―日本語の複合語を例に―」 (陳奕廷・東京農工大学）ほか〈企画・運営〉	10月6日(日)	外国語学部
	24	びまん性肺疾患 Seminar	10月25日(金)	医学部
	25	「メディアとことわざ」〈研究発表〉	10月26日(土)	外国語学部
	26	東京都地域連携・退院支援研究会	10月28日(月)、 12月23日(月)	保健学部
	27	「高齢者にできることを捉え直す：職員と利用者のインタラクション分析」 (細馬宏通・早稲田大学)〈企画・運営〉	11月3日(日)	外国語学部
	28	第48回　杏林医学会総会	11月16日(土)	医学部
	29	呼吸器疾患 Seminar in 府中	11月19日(火)	医学部
	30	IPF Seminar in 内灘	11月29日(金)	医学部
	31	板橋区医師会学術部学術講演会	12月2日(月)	医学部
	32	「対話としてのライフストーリー」 (桜井厚・一般社団法人日本ライフストーリー研究所代表理事)〈企画・運営〉	12月15日(日)	外国語学部
	33	「ある外交官OBのつぶやき②―アニミズムからバチカンまで」 (上野景文・元駐バチカン大使)〈企画・運営・司会〉	12月21日(土)	外国語学部
	34	Interstitial Lung Disease Seminar	令和2年1月8日(水)	医学部
	35	調布呼吸器疾患病診連携の会	令和2年1月27日(月)	医学部
	36	青梅市中学校教育研究会 学校保健研究部研修会	令和2年2月14日(金)	保健学部
	37	退院支援についての講演会	令和2年2月17日(月)	保健学部
	38	シンポジウム『海を越えて日本語の中で生きる人たち』〈企画・運営〉	令和2年2月22日(土)	外国語学部
教育・地域活性化	39	第38回　東京都理学療法学術大会	6月23日(日)	保健学部
	40	第10回　リウマチ膠原病教室	9月7日(土)	医学部
	41	南多摩 医療と介護と地域をつなぐ会 第15回フォーラム	令和2年2月9日(日)	保健学部
健康	42	杉並区COPD教室	5月15日(水)	保健学部
	43	第六回　杏林医学会 市民公開フォーラム	5月18日(土)	医学部
	44	第八回　女性骨盤底勉強会	6月28日(金)	医学部
	45	三鷹市医師会 令和1年度 三鷹市中高年者の運動相談事業 「メディカルチェックと運動処方」	8月5日(月)、 8月8日(木)	保健学部
	46	認知症にやさしいまち三鷹	10月26日(土)	医学部付属病院
	47	前立腺がん市民公開講座	11月2日(土)	医学部
健康・教育	48	須坂市健康祭り	10月5日(土)	医学部
	49	第4回　井の頭乳腺疾患研究会	10月30日(水)	医学部
地域活性化	50	PEG地域連携栄養サポート研究会	5月	医学部
	51	武蔵野消化器・肝疾患医療連携懇談会	6月18日(火)	医学部
	52	多摩消化器外科スモールミーティング	6月、10月	医学部
	53	多摩低侵襲治療研究会	6月、10月	医学部
	54	三鷹消化器カンファレンス	7月 令和2年2月	医学部
	55	ピアサポーター養成と多胎児家庭訪問	8月1日(木)～ 11月30日(土)	保健学部
	56	Digestive diseaseカンファランス	8月	医学部
その他	57	三鷹キャンサーネット	7月25日(木)、 12月12日(木)	医学部

地域との連携
活動 ①

秋田県湯沢市・秋の宮温泉郷との連携協定に基づく活動

■担当者：古本　泰之　外国語学部　准教授
　　井手　拓郎　外国語学部　准教授

概　要

本学外国語学部は、秋田県湯沢市「秋の宮温泉郷イメージアップ推進協議会」と協働で、約10年にわたり観光まちづくりの活動に取り組んでいる。平成24年には「まちづくり・観光事業に関する連携協定」を締結した。

協定による活動の一環として、次の二つの「フィールドスタディ」を行った。なお、この「フィールドスタディ」は外国語学部の基盤教育科目になっている。

（1）観光資源調査と現地関係者との意見交換

令和元年8月6日（火）～8月9日（金）、外国語学部の古本泰之准教授と外国語学部生20名が、湯沢市秋の宮地域を訪問し、「ジオパーク」の視察や地域イベントの補助、湯沢市職員や地域団体関係者との意見交換などを行った。

（2）「かだる雪まつり」への参加

令和2年1月30日（木）～2月3日（月）に外国語学部の井手拓郎准教授と外国語学部生12名が、「第22回かだる雪まつり」（秋田県湯沢市）に参加し、秋の宮地域の方々と一緒に「ミニかまくら」を作るなどのイベント支援を行った。

ねらい

秋の宮温泉郷との連携を推し進め、イベントの運営支援に携わりながら交流を図ることにより、地域と本学の双方が、お互いを高め合う関係を続けていく。同時に、現地との交流を通じて、観光による地域振興活動を学ぶ。

成　果

秋の宮温泉郷地域を中心とする湯沢市にとっては、これまで継続してきた本学との連携事業を通じて、地元の価値を再発見・再評価する機会となっている。

8月の観光資源調査では、湯沢地域の観光の現状を把握し、関係団体と意見交換会を実施することで、ジオパーク振興における情報発信等の提言を行うことができた。

また、2月初旬に開催された雪まつりについては、学生参加の事業として12年目を迎えた。参加学生のうち2名はすでに単位取得済みにも関わらず、自らリピート参加を希望した学生であり、地域との深い絆が感じられる継続事業となった。

観光資源調査

かだる雪まつり

地域・観光関係者とのワークショップ

ジオサイトめぐり

成果発表

地域との連携
活動 ②

三鷹市・羽村市・八王子市・武蔵野市との連携

三鷹市

平成29年８月に株式会社アトレとの地域貢献パートナーに関する協定を締結し、令和元年度もアトレヴィ三鷹と多くの協働事業を進めた。総合政策学部、外国語学部、保健学部の教員・学生が、食・情報・健康・文化などに関するテーマで活動を展開した。市との連携も深まり、教育委員会を通じた「みたか地域未来塾」への学習支援員の派遣やその他の連携事業を継続実施した。

●三鷹市地域ケアネットワーク合同事業

令和元年12月７日（土）、三鷹ネットワーク大学で「三鷹市地域ケアネットワーク合同事業」が開催された。ポスターセッション形式で大学と地域の情報交換が行われ、本学からは総合政策学部の藤原究先生と斉藤崇先生のゼミナール生が「Mitaka Kichijoji PROJECT」の活動について発表した。

「Mitaka Kichijoji PROJECT」は、平成24年に総合政策学部の学生有志によって結成されたボランティア団体で、現在は井の頭キャンパスを中心に連雀、牟礼、新川などの各地区で清掃活動を行っている。平成30年にはその活動実績が認められ、三鷹市の環境活動表彰を受賞している。

学生たちは活動内容の紹介、目的、やりがい、今後の活動目標や改善点などについて発表した。発表がこのプロジェクトを広めるきっかけとなり、地域社会と学生の交流がより活発になるよう、大学としてサポートしていきたい。

地域ケアネットワーク　学生発表

●三鷹市内の中学生による職場体験

令和元年10月30日(水)から11月１日(金)まで、三鷹市立第三中学校２年生の生徒２名が本学を訪れ職場体験を行った。井の頭図書館やキャリアサポートセンター、庶務課、国際交流課、地域交流課など８部署をまわり、大学を支える仕事を体験する２名は真剣に取り組んでいた。最終日には本学の「地域交流活動かわら版」の作成業務を行い、医学部１年生の「地域体験学習 報告会」で掲載用写真の撮影や記事のレイアウトを考えた。

参加した生徒からは「大学の教育を支えている事務の仕事はとても多くて、一回一回の仕事がとても大変でした。事務の仕事があってこそ大学のシステムが成り立っていることを学ぶことができたので、中学校の行事などを支えている仕事を引き受けたい」などの感想が寄せられた。

中学生職場体験（キャリアサポートセンター）

中学生職場体験（図書館）

三鷹市 ボランティア参加一覧（一部掲載）

No.	活動名称	実施期間	学部
1	MISHOP　三鷹国際交流ウォークラリー	５月19日	外国語学部
2	三鷹市体力測定会	６月８日	保健学部
3	中学生に対するBLS指導	６月～令和２年２月	保健学部
4	井の頭キャンパス健幸ストレッチ教室	７月～令和２年２月	保健学部
5	第16回東京都作業療法学会　運営ボランティア	７月７日	保健学部
6	プール指導員	７月22日	保健学部
7	東京弘済園納涼会	８月４日	保健学部
8	日本学校健康相談学会　第17回夏季ワークショップ	８月17日	保健学部
9	連雀学園三鷹市立南浦小学校での国際交流	９月12日、令和２年２月18日	外国語学部・大学院
10	地域ケアネットワーク　地域向け主催事業（新川中原・井の頭）	10月29日、12月21日	保健学部
11	「東京弘済園まつり」ボランティア	11月３日	保健学部
12	JA東京むさし農業祭　活動サポート（三鷹市）	11月９日、11月10日	外国語学部
13	第28回三鷹市駅伝大会	11月24日	保健学部
14	みたかキャンドルナイト	12月７日	外国語学部
15	三鷹市老人クラブ　ロコモティブシンドローム測定会	12月７日	保健学部

羽村市

「19th アート in はむら展」、青梅・羽村ピースメッセンジャー、学生講座企画など、教育的な地域貢献活動を展開することができた。また、羽村市スポーツセンターで健康寿命延伸をはかるための支援活動「運動健康増進プログラム」を実施した。

●学生連携企画講演会

本学は、学生が企画・運営に携わる生涯学習機会の提供事業として、平成29年度から羽村市生涯学習センターゆとろぎで「学生連携企画講演会」を開催している。

昨年度に続き、今回も外国語学部観光交流文化学科・古本泰之ゼミナールの３年生が企画を担当。令和元年12月７日（土）に講演会「1964年と2020年の東京オリンピック・パラリンピックの比較」（講師：鈴木隆広氏、日本ウェルネススポーツ大学専任講師、前東京都オリンピック・パラリンピック準備局総務部局務担当課長）が実施され、約40名が参加した。

学生たちには、実体験を通してイベントの企画・運営を学ぶ場となり、学外団体の関係者と協力して企画を実現させる貴重な経験を得ることになった。

●キャッシュレス社会入門講座

令和元年12月22日（日）、羽村市生涯学習センターゆとろぎで、本学総合政策学部の大川昌利教授によるキャッシュレス社会についての入門講座を実施した。国内でも取り組みが進むキャッシュレス化の背景を踏まえ、お金や貨幣の成り立ちから、一番身近なクレジットカードを中心に一般参加者に役立つ内容の講義となった。

参加者からは「豊富な知識に基づく分かりやすい丁寧な講演でした。今を的確に捉え、これからの社会に向けた考察も見事でした」などの感想が寄せられた。

学生連携企画講演会

キャッシュレス社会入門講座の講師を務めた大川先生

羽村市 ボランティア参加一覧（一部掲載）

No.	活動名称	実施期間	学部
1	はむら健康の日	５月19日	保健学部
2	神明台自習室「みらい」	９月９日	保健学部
3	杏林大学学生連携企画講演会	12月７日	外国語学部

八王子市

令和元年度は継続して大学コンソーシアムの事業に参画し、教育活動・社会貢献活動を実施した。JR八王子駅北口の西放射線ユーロードで開催された「第14回学生天国」で選挙啓発活動などを行い、地域と大学間の連携を推進することができた。

●大学コンソーシアム八王子「学生発表会」で奨励賞

令和元年12月７日(土)、８日（日）に八王子学園都市センターで開催された「第11回大学コンソーシアム八王子学生発表会」で、総合政策学部の半田ゼミナールのチームが八王子市の防災対策の改善提案『New Style 防災』を発表。「学生が八王子市長へ直接提案！～最終選考会～」で奨励賞を受賞した。

発表では、土砂災害が発生する可能性が高いにも関わらず、非常食の賞味期限切れや防災グッズの劣化などを理由に防災対策が進んでいない八王子市の状況を指摘。その解決のため、企業が防災グッズを管理し、必要な時に貸し出す「レンタル式防災グッズ」や、定期的に非常食を配達する「定期式非常食」を考案し、『New Style 防災』として八王子市に提案した。

半田ゼミの中島彩美さんは受賞後、「今回のコンソーシアム八王子を通じて、チームで協力して目的を成し遂げるための協調性を得ることができました。この経験を自信にして社会に出た時に役立てていきたい」と語った。

●大学コンソーシアム八王子連携事業「MICEツアー」

外国語学部観光交流文化学科・古本泰之ゼミナールは平成30年度から２年間にわたり、大学コンソーシアム八王子連携事業としてMICE（ビジネスイベントや国際会議など）の展開における八王子市内観光資源活用の可能性について調査してきた。

令和元年度はモニターツアーを企画し、その評価を多面的に行うことで観光資源活用の可能性を明らかにすることに取り組み多くの方々の協力を得て、令和２年１月11日（土）、13名のモニターを集め帝京大学経済学部観光経営学科の小笠原ゼミナールと共催でツアーを実施。八王子市内の高等教育機関で開発された商品をギブアウェイとして提供する活動も行った。

ツアーの成果は、「わかる !! MICEセミナー」（八王子観光コンベンション協会主催）、「学生企画事業補助金成果報告会」（大学コンソーシアム八王子主催）で発表し、「実現性がある内容」という評価をいただいた。

学生発表会

MICEツアー

八王子市 ボランティア参加一覧

No.	活動名称	実施期間	学部
1	八王子学生天国での模擬投票の実施	５月12日	総合政策学部
2	みんなの町の清掃デー	５月26日	保健学部・総合政策部・外国語学部
3	クライミング世界選手権学生通訳ボランティア	８月13日	外国語学部
4	保健室ボランティア	12月４日、12月５日	保健学部
5	令和元年度 南多摩医療と地域と介護をつなぐ会 第15回フォーラム	令和２年２月９日	保健学部

武蔵野市

●包括連携協定を締結

令和２年１月28日（火）に包括連携協定を締結した武蔵野市での地域活動は、これまで特に介護、看護や健康事業で行われてきたが、さらに積極的な活動が始まった。これによってこれまで築き上げてきた多大な社会貢献活動の実績を活用し、武蔵野市の活性化とコミュニティの創生に寄与することが期待される。

●武蔵野税務署長の特別講義

令和元年10月28日（月）、「租税法Ⅱ」の授業（総合政策学部・知原信良教授）で、武蔵野税務署の古宇田崇署長が「日本の財政の状況～必要な歳入と歳出～」をテーマに特別講義を行った。

古宇田署長は、身の周りの公共サービス（教育、警察や消防、インフラ整備など）に投入されているお金は消費税や所得税、酒・たばこ税のような国税から賄われていることや、憲法第30条により国民の納税の義務が定められていることなど、税に関する基礎的な内容と税の仕組みとその重要性について話した。

古宇田署長は「一番学生たちに伝えたいことは『現在1,000兆円を越えている国債を返していくのは今の大学生世代であり、他人事ではない』ということです」と強調した。

聴講した学生たちは「最初は財政に興味がなかったが、赤字の話を聴き、他人事じゃないと思った」「2040年の60代・70代の話を聴いて、自分に関係ない話ではなく不安になった」などと話し、自分たちが日本の将来を担っていくという意識を強く持った。

●看護・介護分野で武蔵野市と連携促進へ

保健学部看護学科は、武蔵野市の介護・看護や健康事業の支援に取り組んでいる。同市が主催する「ケアリンピック武蔵野」には、平成28年から教員や学生が参加し、介護・看護職者間の情報交換・スキルの研鑽、および市民との交流を支援している。令和元年度は、11月23日（土）、武蔵野スイングホールで「ケアリンピック武蔵野2019～たべて！まなんで！つかって！知るカイゴの世界～」が開かれた。

包括連携協定の締結を機に、保健学部をはじめとし、今後さらなる連携強化、地域課題の解決を支援していく。

包括連携協定を締結した大瀧学長と松下市長

松下市長を囲む本学教員

武蔵野税務署長の特別講演

ケアリンピック武蔵野2019

武蔵野市 ボランティア参加一覧

No.	活動名称	実施期間	学部
1	中高生と大学生の高大連携ボランティア活動	８月６日、９月14日、９月15日 ９月25日、９月28日、９月30日	保健学部
2	JR東日本八王子支社との協働「学生が考えた駅からハイキング」プログラムの企画・運営	10月10日、10月15日	外国語学部
3	ケアリンピック武蔵野	11月23日	保健学部

地域との連携
産学連携活動 ①

株式会社アトレとの活動を展開

アトレヴィ三鷹での栄養・運動・健康相談プログラム

■実施日：令和２年１月24日（金）
■担当者：石井　博之　保健学部 理学療法学科 教授
太田ひろみ　保健学部 看護学科 教授
朝野　　聡　保健学部 健康福祉学科 准教授
大久　朋子　保健学部 健康福祉学科 准教授
相原　圭太　保健学部 理学療法学科 助教
楠田　美奈　保健学部 看護学科 助教

三鷹駅構内において、アトレヴィ三鷹共催による「健康運動相談プログラム」を昨年度から実施している。２度目となる今回は「正月の不摂生対策」というテーマで実施した。主な目的は、本学保健学部の専門性を活かし、三鷹駅利用者に対し、栄養と運動、健康に関する理解を深めてもらう地域貢献を行うことである。

まず、令和２年１月６日（月）からアトレヴィ三鷹の店内に「正月の不摂生解消フローチャート」のポスターを展示した。また、１月24日(金)に２階のイベントスペースで「食事・運動・健康相談コーナー」を設置して、体組成計や血管年齢測定機による各種測定と、必要に応じてスタッフに相談できる場を提供した。

相談コーナー来場は昨年より増え、40名が参加し大変盛況だった。体組成や血管年齢などの測定への興味が参加のきっかけとなり、測定結果に関しスタッフがコメントすることで参加者との交流ができた。その中で保健学部の専門性を活かして貢献することができた。

また、今回は中高齢者だけでなく高校生の参加者もあり、広い年齢層に我々の専門性を伝えることができた。

反省点と今後の課題は、スポーツセンターや保健センターなどで実施される相談会の参加者は目的がある程度明確であるが、駅構内での相談会では参加へのきっかけ作りが大切であると実感した。今回は測定機材導入がその役割を果たしたが、さらに有効な手段を検討したい。

「正月の不摂生解消フローチャート」のポスター

血管年齢を計測

外国人利用客向け英語に関したコラボレーション

■担当者：坂本　ロビン　外国語学部 英語学科 教授

JR三鷹駅とアトレヴィ三鷹には外国人利用客も多いことから、坂本ロビンゼミナールは食事制限に対応できるようフードメニュー用のシールを作成した。また、外国人利用客に対応する店員のために、英会話の想定質問応答集や英訳した案内図も作成した。

この企画は、同ゼミナールが令和元年９月から企画案を立て、アトレヴィ三鷹と協議・フィードバックを繰り返しながら進めた。３年生の16名が取り組んだものである。

地元の魅力を「みたから」で発信

■担当者：進邦　徹夫　総合政策学部 総合政策学科 教授

地元情報発見サイト「みたから」は、“人と地域がつながる場所”でありたいというアトレヴィ三鷹の想いに賛同した本学の現役学生が地域の魅力的なスポットや「ヒト・コト・モノ」の情報を発信している。

総合政策学部総合政策学科の進邦徹夫教授のもと、１年間ゼミナールの学生が連載した。「杏林生がまち歩き！」と称して駅周辺を紹介するなど、地域でのフィールドスタディなどを通して、広くまちづくりや地域活性化について学んでいる。

華道部によるお正月の生け花展示

■実施日：
令和元年12月26日（木）～令和２年１月４日(土)
■担当者：楠田　美奈　保健学部 看護学科 助教

展示を行った華道部の学生たち

完成作品

令和元年12月26日（木）から令和２年１月４日（土）まで、アトレヴィ三鷹改札フロアとひだまりバルコニーで、楠田助教指導のもと華道部が制作した生け花を展示した。

26日には多くの利用客が行き交う中で展示準備を行う「生けこみパフォーマンス」を実施。花材には葉牡丹や水仙などのほか、前年に引き続き八王子キャンパスの青竹を使用した。学生が一丸となって熱心に準備を重ね、お正月らしい作品に仕上がった。

地域との連携
産学連携活動 ②

三菱地所レジデンス株式会社との連携

産学連携協定を締結

令和２年２月29日（土）、本学は三菱地所レジデンス株式会社と産学連携協定を締結した。本学では文部科学省「地（知）の拠点整備事業」の一環として、『生きがい創出』『健康寿命延伸』『災害に備えるまちづくり』を３本柱とした杏林CCRC研究所を設置し、地域課題解決のためのさまざまな取り組みを推進している。今回の協定はその柱の一つである防災対策をより強化し、本学と三菱地所レジデンスが持つお互いの資源を有効に活用していくために締結された。

三菱地所レジデンスとの協定締結

ワークショップ「『そなえるドリル』から地域防災を考えよう！」を開催

■実施日：令和元年９月20日（金）
■担当者：三浦　秀之　総合政策学部 総合政策学科 准教授

令和元年９月20日（金）、本学と三菱地所レジデンスは、ワークショップ「『そなえるドリル』※から地域防災を考えよう！」を共催した。この企画は、総合政策学部三浦秀之准教授が、三菱地所レジデンスの三菱地所グループ防災倶楽部で活動する岡崎新太郎氏に働きかけて実現したもので、本学学生、教職員、三鷹市民ら総勢39名が参加した。

当日は、参加者が６つのグループに分かれ、『そなえるドリル』を利用して、防災を自分事としてとらえ、普段からの備えができているかなどについて確認し合い、対処方法についての意見交換も行われた。

ファシリテーターを務めた岡崎氏は「地域で顔を知っている人が声かけすることで、みんなを安心させることができる。日ごろから地域内でコミュニケーションをとることは非常に重要です」と語った。

企画した三浦准教授は、「地域には貴重な知恵を持った人や便利なモノといった資源があることを実感し、より人と人との出会いを大切にしながら、日ごろから防災を考えていくきっかけにしていただければありがたい」と締めくくった。

参加学生の一人は「ワークショップは自分自身の防災対策を改めて考え直すいい機会になった。東京に住んでいると災害も少ないため準備を疎かにする傾向がある。普段の会話では話題に上がりにくいテーマについて、三菱地所レジデンスや地域住民の方々とディスカッションできたことは素晴らしい経験になった」と感想を述べた。

※『**そなえるドリル**』　三菱地所レジデンスが作成した防災ツールであるが、本学総合政策学部のグローバル・キャリア・プログラム（GCP）を履修する学生が日本在住の外国人に向けにその防災ツールを広めるために英訳作業に取り組んでいる。

「そなえるドリル」ワークショップ

令和元年度　杏林大学公開講演会・公開講座

本学では令和元年度において、大学が持つ知的資源をより広く地域住民に還元するため、地（知）の拠点整備事業のテーマである「生きがい創出」「健康寿命促進」「災害に備えるまちづくり」を継承したテーマの他、知識や教養に結びつく多数の公開講演会を実施した。

本学井の頭キャンパス、三鷹キャンパスのほか、三鷹市・三鷹ネットワーク大学、羽村市・羽村生涯学習センターゆとろぎ、八王子市・八王子学園都市センターを会場として、計24回開催し、いずれの講演会にも多数の聴講者が来場し、おおむね好意的な評価が寄せられた。

杏林大学公開講演会

No.	日程	時間	講演タイトル	講　師	開催場所
1	5月11日（土）	10:30-12:00	言葉のはたらき	外国語学部 特任教授　金田一秀穂	井の頭キャンパス
2	5月18日（土）	14:00-15:40	杏林医学会講演会 「中高年の排尿トラブルを解消します」	医学部 教授　桶川　隆嗣 医学部 教授　福原　浩 医学部 講師　多武保光宏 医学部 学内講師　金城　真実 医学部 非常勤講師　谷口　珠実	三鷹キャンパス
3	5月25日（土）	10:30-12:00	認知症のことを知ろう	医学部 教授　神﨑　恒一	井の頭キャンパス
4	6月5日（水）	15:30-17:30	衰退観光地からの脱却 ―観光カリスマが語る人・魅力づくりからまちづくりへ―	萌木の村(株) 代表取締役　舩木　上次	井の頭キャンパス
5	6月8日（土）	10:30-12:00	高齢者も楽しめるボッチャ	保健学部 准教授　一場　友実	井の頭キャンパス
6	6月22日（土）	13:30-15:00	高齢者の腰痛　―坐骨神経痛、腰曲がり	医学部 准教授　細金　直文	三鷹キャンパス
7	6月26日（水）	15:30-17:30	1．東京の水源地・丹波山村で今起きているコト 2．温もりのある街をつくる	NPO法人小さな村 総合研究所　小村　幸司 NPO法人街のコンシェルジュ　青木　弘道	井の頭キャンパス
8	7月6日（土）	13:30-16:30	がんから身を守るために	医学部 教授　正木　忠彦 医学部 教授　阿部　展次 医学部 教授　阪本　良弘 医学部 教授　須並　英二	三鷹キャンパス
9	7月13日（土）	10:30-12:00	人生100年時代のキャリアを考える	キャリアサポートセンター課長　米津　哲也	井の頭キャンパス
10	7月20日（土）	14:00-15:30	翻訳者が教える英語攻略法 ―あなたは本当に英語が読めていますか？	外国語学部 准教授　関　美和	三鷹ネットワーク大学
11	8月31日（土）	14:00-16:00	龍馬の夢を挫いた男～勝海舟に届いた手紙	総合政策学部 教授　松田　和晃	羽村市生涯学習センター ゆとろぎ
12	9月21日（土）	13:30-15:00	米中貿易戦争から「新しい冷戦」へ？	総合政策学部 講師　島村　直幸	井の頭キャンパス
13	9月28日（土）	10:30-12:00	最新の褥瘡予防と治療 床ずれ；褥瘡を在宅で作らないために	医学部 教授　大浦　紀彦	三鷹キャンパス
14	10月26日（土）	13:30-15:00	黎明期 日墺関係の周辺 ―西園寺公望と室孝次郎―	総合政策学部 教授　松田　和晃 総合政策学部 教授　進邦　徹夫 総合政策学部 准教授　木暮健太郎 総合政策学部 准教授　半田　英俊	井の頭キャンパス
15	11月2日（土）	10:30-12:00	高齢者のがん治療	医学部 教授　長島　文夫	井の頭キャンパス
16	11月2日（土）	13:30-15:00	私の人生予定表 ―満足のいく最期を描くアドバンス ケア プランニング	保健学部 准教授　角田ますみ	井の頭キャンパス
17	11月16日（土）	13:30-15:30	杏林医学会講演会 「タバコの健康障害、肺の病気を考える」	医学部 教授　石井　晴之 医学部 講師　須田　一晴 医学部 講師　渡辺　雅人 医学部 助教　高田　佐織 医学部 助教　本多紘二郎	三鷹キャンパス
18	12月7日（土）	10:00-11:30	禁煙して健康寿命をのばそう！	医学部 教授　滝澤　始	三鷹ネットワーク大学
19	12月21日（土）	10:00-11:30	2020年オリンピック前後のホテル産業	外国語学部 准教授　西山　桂子	三鷹ネットワーク大学
20	令和2年 1月11日（土）	10:30-12:00	これも薬疹？ ―様々な薬疹の臨床から―	医学部 教授　水川　良子	三鷹キャンパス
21	1月18日（土）	10:20-11:50	からだを支える「口腔ケア」	保健学部　講師　寺島　涼子	八王子学園都市センター
22	1月25日（土）	13:30-15:00	トランプ政権の政治外交	総合政策学部 講師　島村　直幸	八王子学園都市センター
23	1月30日（木）	13:30-16:00	よくわかる、知って得する！「糖尿病のはなし」 ～糖尿病を知って、生活習慣病を予防しよう！～	医学部 教授　安田　和基	羽村市生涯学習センター ゆとろぎ
24	2月4日（火）	14:00-16:00	発達障害に関する啓発講演会 「小児の発話障害とその対応～構音障害と吃音を中心に～」	医学部付属病院 言語聴覚士　石井　翼	羽村市生涯学習センター ゆとろぎ

三鷹市民聴講生講座【前期 4月～ 7月】

No.	開講日	時間	講　座　名	講　師
1	4月5日～ 7月19日 15回（各回金曜日）	9:00-10:30	生活と法（春）	総合政策学部 教授　大山　徹
2	4月5日～ 7月19日 15回（各回金曜日）	16:20-17:50	英語学特論Ⅲ	外国語学部 准教授　八木橋宏勇
3	4月9日～ 7月23日 15回（各回火曜日）	10:40-12:10	中東・アフリカの政治・経済	総合政策学部 教授　知原　信良
4	4月9日～ 7月23日 15回（各回火曜日）	13:00-14:30	英語学演習Ⅰ	外国語学部 教授　稲垣　大輔

三鷹市民聴講生講座【後期 9月～ 1月】

No.	開講日	時間	講　座　名	講　師
1	9月18日～令和2年1月18日 15回（各回水曜日）	10:40-12:10	生命倫理学	保健学部 准教授　角田ますみ
2	9月20日～令和2年1月16日 15回（各回金曜日）	16:20-17:50	英語学演習Ⅳ	外国語学部 准教授　八木橋宏勇
3	9月23日～令和2年1月15日 15回（各回月曜日）	13:00-14:30	時事問題研究Ｂ	総合政策学部 講師　島村　直幸
4	9月23日～令和2年1月15日 15回（各回月曜日）	16:20-17:50	高齢保健学	保健学部 准教授　岡本　博照
5	9月24日～令和2年1月14日 15回（各回火曜日）	13:00-14:30	英語学特論Ⅱ	外国語学部 教授　稲垣　大輔

三鷹市民聴講生講座【通年 5月～ 11月】

No.	開講日	時間	講　座　名	講　師
1	5月8日～ 11月 11回（各回水曜日）	15:30-17:30	地域活性化の理論と実践	オムニバス形式

八王子学園都市大学・いちょう塾【前期 4月～ 7月】

No.	開講日	時間	講　座　名	講　師
1	4月4日～ 7月18日 15回（各回木曜日）	10:40-12:10	財政論	総合政策学部 教授　知原　信良
2	4月4日～ 7月18日 15回（各回木曜日）	13:00-14:30	国際経済学B（金融）	総合政策学部 教授　西　孝
3	4月6日～ 8月24日 10回（各回土曜日）	15:20-16:50	日本古典講読、漢文演習 ～最古の日本文学と漢文演習の講座～	外国語学部 元教授　草場　裕
4	4月9日～ 7月23日 15回（各回火曜日）	13:00-14:30	マクロ経済学	総合政策学部 教授　西　孝
5	4月11日～ 8月1日 10回（各回木曜日）	15:20-16:50	バチカン・西欧と日本 ～文明論の観点から日欧を解析～	外国語学部 元客員教授　上野　景文
6	4月25日～ 6月13日 7回（各回木曜日）	13:30-15:00	シェイクスピアの世界（21） ～『コリオレーナス』に見る公と私、そして母と息子の関係～	外国語学部 元教授　川地　美子
7	5月9日～ 5月23日 3回（各回木曜日）	15:20-16:50	いちから分かるシェイクスピア ～古典を楽しむために～	外国語学部 元教授　川地　美子
8	5月30日～ 7月25日 6回（各回木曜日）	15:20-16:50	高齢者における心の健康とは ～心身ともに健康で生きることの難しさ～	杏林大学長　大瀧　純一

八王子学園都市大学・いちょう塾【後期 9月～ 2月】

No.	開講日	時間	講　座　名	講　師
1	9月7日～令和2年1月18日 10回（各回土曜日）	15:20-16:50	日本古典講読、漢文演習 ～記紀歌謡を読み、且つ又漢文演習をする～	外国語学部 元教授　草場　裕
2	9月19日～令和2年1月9日 15回（各回木曜日）	13:00-14:30	ヨーロッパ政治外交論	総合政策学部 講師　島村　直幸
3	9月23日～令和2年1月15日 15回（各回月曜日）	10:40-12:10	ヨーロッパ経済論	総合政策学部 教授　西　孝
4	9月23日～令和2年1月15日 15回（各回月曜日）	13:00-14:30	時事問題研究B ～国際編～	総合政策学部 講師　島村　直幸
5	9月26日～ 12月12日 6回（各回木曜日）	15:20-16:50	ローマ法王とバチカン ～フランシスコ法王来日を控え～	外国語学部 元客員教授　上野　景文
6	10月17日～ 12月12日 7回（各回木曜日）	13:30-15:00	シェイクスピアの世界（22） ～『恋の骨折り損』における求愛ゲームと言葉遊戯～	外国語学部 元教授　川地　美子
7	令和2年3月9日～ 3月23日 3回（各回月曜日）	18:30-20:00	※新型コロナウイルス感染症の拡大による影響をうけて中止 続・〈文章〉の言語学　～良文・悪文・揺れる文～	外国語学部 准教授　八木橋宏勇

COC+ 実績報告

文部科学省 地(知)の拠点

「ふるさといわて創造プロジェクト」事業

「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC＋）」は、平成25年度から始まった「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」を発展させたものとして、平成27年度から開始された。各大学が地方公共団体や企業等と協働して学生にとって魅力ある就職先を創出するとともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革を断行する大学の取り組みを支援することを目的とした事業である。

本学は岩手大学が進める「ふるさといわて創造プロジェクト」事業にCOC＋参加校として取り組み、活動を展開してきた。COC＋事業の最終年度である令和元年度は、岩手県をフィールドとした授業の実施や同県出身学生に対する就職支援、同県へのインターンシップ派遣等、首都圏大学の役割としてその地域が求める人材の育成を継続して行った。

COC＋ 実績報告 ①

「ふるさと発見！大交流会 in IWATE 2019」に参加

本学は、岩手大学が展開する「ふるさといわて創造プロジェクト」における唯一の首都圏大学として、さまざまな形で連携を強化してきた。令和元年11月23日(土)に行われた「ふるさと発見！大交流会 in IWATE 2019」では、ブースの出展や学生交流を通じて、岩手県を支える魅力的な人材育成のPR活動を展開した。

３回目の開催となる今回は、120以上の団体が出展し、それぞれの活動の社会的意義や特徴的な取り組みの展示発表を通じて、参加した若者たちに魅力ある生き方や働き先を考える機会を提供した。

本学のブースでは、①所属学部の学びを活かした地域活動や、②岩手県を舞台とした「フィールドスタディ」が科目提供されていること、③地域課題への認識を深めることの重要性の理解、④「東京にいながら岩手について学び」、その学びを地域に還元できるような教育が提供されていること、などを紹介した。ブースを訪れた高校生からは「進学先として視野に入れたい」といった感想も寄せられ、岩手県内で本学の認知度をさらに広げるための良い機会になった。

交流会場

ブースの展示物

COC＋ 実績報告 ②

「ふるさといわて創造人材」に本学から２名認定

本学が平成27年度から取り組んでいる「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC＋）」では、事業責任大学である岩手大学が進める「ふるさといわて創造プロジェクト」事業に協力し、さまざまな活動を行っている。

その一つとして平成31年４月から始まった「ふるさといわて創造人材教育プログラム※」は、プロジェクトに参加する高等教育機関（岩手大学、岩手県立大学等）が提供する「ふるさといわて地域科目」の中から所定の単位を修得し、審査に合格すると「ふるさといわて創造人材認定証」が授与される。今回、所定の科目に取り組んだ外国語学部観光交流文化学科４年生の髙橋遥さんと中村玲来さんの２名に認定証が授与された。

本学では科目の履修や県内大学の学生とともに取り組むプロジェクトを通して、自大学の学びだけでは得ることができないコミュニケーション能力、企画力、課題解決力、行動力等を養成できると考えている。髙橋さんと中村さんは単位の修得とともに見事審査に合格したものである。２人とも令和２年３月に本学を巣立ったが、このプログラムで経験した実践的な学びを活かし、地方創生を意識できる社会のリーダーとして活躍してくれることを期待している。

※岩手県の持続可能な発展と復興のため、地域の課題解決に向けて主体的に行動・発信できる人材の育成を目指したもの。

中村玲来さん
（観光交流文化学科４年）

髙橋遥さん
（観光交流文化学科４年）

COC＋ 実績報告 ③

「ジョブカフェいわて」インターンシップに参加

岩手県は、首都圏大学の学生が岩手県内で就業体験する新しい形のインターンシップに取り組んでおり、この仕組みを利用して本学から１名が参加した。

これは、岩手県が就職･仕事のサポート施設「ジョブカフェいわて」を窓口に、学生から学びたい内容をリサーチして行うというインターンシップである。今回は総合政策学部の３年生が18日間にわたり、泊まり込みで県内の「泊まれるビアバー・安比ロッキーイン」でベッドメイクや調理、さらに施設の運営全般の業務を体験した。

COC＋ 実績報告 ④

保健学部理学療法学科が県内の施設を見学実習

保健学部理学療法学科は８月27日（火）、28日（水）に、見学実習の一環として、１泊２日で岩手県内の施設訪問を行った。学生58名、引率教員４名が参加した。

１日目は栃内第二病院といわてリハビリテーションセンターで、急性期から回復期のリハビリテーションを見学、さらに２日目は、東八幡平温泉病院とその関連施設で主に地域における理学療法士の活動の多様性を学んだ。どの施設でも理学療法士や関連職の先生方から丁寧な説明をいただき、リハビリテーション施設の多様性とその役割に加え、急性期から生活期までの理学療法士の役割と魅力について理解を促すことができた。参加した学生からは、「理学療法士を選んで良かった」などの感想があり、大変有意義な実習となった。

栃内第二病院での実習風景

いわてリハビリテーションセンターでの
実習風景（言語聴覚療法科）

いわてリハビリテーションセンターでの
実習風景（理学療法科）

COC＋ 実績報告 ⑤

外国語学部が釜石市で観光関連実習を実施

令和元年度の外国語学部科目「フィールドスタディⅣ（釜石）」は、COC＋事業に基づき、岩手県釜石市をそのフィールドとした。

具体的には、観光交流文化学科の学生17名が、釜石における「復興ツーリズム」の現状と、それに関わる人々の思いについての理解を踏まえ、『首都圏大学の学生がどのような視野を持つべきかについて学修する』ことを目的として、事前指導、現地調査、事後指導に参加した。

現地調査は、令和２年２月４日（火）～２月７日（金）の４日間で行った。「宿泊客受け入れ増加」「つながり人口増加」「ポストラグビーワールドカップの観光振興」の３テーマに分かれ、株式会社かまいしDMCのサポートを受けながら、市関係者からのレクチャーを受講した。さらに観光資源視察と関係者へのインタビュー調査を行い、最終日の事後指導では岩手大学釜石キャンパスで観光振興に向けた提案を発表、意見交換を行った。

学生にとっては、地方創生における観光の意義と、地域で活動するときに〝求められる力〟について、現場体験を通じて理解する機会となった。

観光関係者によるレクチャー

釜石復興スタジアム視察

釜石祈りのパーク視察

COC+ 実績報告⑥ 令和元年度 COC＋事業における取り組み

授業への招聘（杏林大学 井の頭キャンパス）

件　　名	日 程	招 聘 者	内　　容
必修科目 「地域と大学」に招聘	7月19日（金）	岩手大学 小野寺純治（特任教授） 穴田　光弘（客員准教授） 船場ひさお（客員教授）	総合政策学部、外国語学部の１年必修科目「地域と大学」において、岩手大学のCOC＋の取り組みやインターンシップからの地方創生への関わりなどについて、講義をしていただいた。

会議・現地訪問等への参加

件　　名	日 程	出 席 者	内　　容
COC+事業に伴う福島県相馬市との交流教育事業に関する打ち合わせについて	5月10日(金) 〈相馬市〉	古本泰之（地域交流推進室長） 井上晶子（地域交流推進室 特任講師）	今年度のＣＯＣ＋事業へ還元のため「フィールドスタディⅣ」の昨年度開催地を訪問し、ふりかえりの取りまとめを行った。
ふるさといわて創造協議会運営委員会	6月5日(水) 〈岩手大学〉	深沢貴沙（地域交流課）	ふるさといわて創造協議会運営委員会へ出席し、本学の取り組みについて述べた。
ふるさといわて創造プロジェクト外部評価委員会	6月10日(月) 〈岩手大学〉	依田千春（地域交流課長）	ふるさといわて創造プロジェクト外部評価委員会へ出席。COC＋コーディネーターからの事業概要説明に続き外部評価委員からの質疑が行われた。
ふるさといわて創造協議会全体会議	7月17日(水) 〈岩手大学〉	大瀧純一（杏林大学長） 古本泰之（地域交流推進室長）	ふるさといわて創造協議会全体会議へ出席し、本学の取り組みについて述べた。
保健学部 理学療法学科１年次必修科目「見学実習」	8月27～28日 〈岩手県〉	石井博之（保健学部教授）	保健学部理学療法学科の授業として岩手県内の施設訪問をし、地域における理学療法士の活動を学ぶ機会とした。
ふるさといわて創造協議会教育プログラム開発部会	10月16日(水) 〈岩手大学〉	古本泰之（地域交流推進室長）	ふるさといわて創造協議会教育プログラム開発部会議へ出席し、本学の取り組みについて述べた。
「ふるさと発見！ 大交流会 in IWATE 2019」	11月23日(土) 〈岩手産業文化センター〉	深沢貴沙（地域交流課）	地元就職への機運の向上、イノベーション創出の機会提供を目的として開催された交流会に参加し、本学の案内と地域での学びを紹介した。
外国語学部 基盤教育科目 「フィールドスタディⅣ」	令和２年 ２月４～７日 〈釜石市〉	古本泰之（地域交流推進室長） 井上晶子（地域交流推進室 特任講師）	外国語学部の授業として岩手県釜石市をフィールドに観光を専門とする首都圏大学の学生が持つべき視野について学ぶ機会とした。
「COC+フォーラム」	令和２年 ２月12日(水) 〈アートホテル盛岡〉	大瀧純一（杏林大学長） 依田千春（地域交流課長）	ふるさといわて創造協議会主催の「COC+フォーラム」に参加した。

インターンシップ、就職等に関する情報提供（杏林大学 井の頭キャンパス）

件　　名	日 程	出 席 者	内　　容
実践型インターンシップの告知〈キャリアサポートセンター〉			
総合政策学部１年：「地域と大学」 総合政策学部３年：「キャリア開発演習Ⅰ」	5月29日(水)	総合政策学部１・３年生	キャリアサポートセンター職員が授業の一部やセミナー開催時にNPO法人wizの主催する実践型インターンシップについてチラシを配布し説明周知した。
総合政策学部２年：「キャリア開発論Ⅰ」	6月7日(金)	総合政策学部２年生	
外国語学部２年：「キャリアデザインⅠ」	6月12日(水)	外国語学部２年生	
外国語学部３年：「キャリアデザインⅢ」	6月5日(水)	外国語学部３年生	
総合政策学部２年：「キャリア開発論Ⅱ」 総合政策学部１年：「ライフ・プランニングⅡ」	12月4日(水)	総合政策学部１・２年生	
実践型インターンシップの告知〈外部・地域交流課〉			
保健学部・総合政策学部・外国語学部 学部生を対象とした説明会	6月27日(木)	総合政策学部生 外国語学部生	株式会社パソナ東北創生の城守理佳子氏を招聘し、「復興創生インターンシップ」について説明会を開催した。
NPO法人wiz 担当者による授業　実践型インターンシップの告知〈地域交流課〉			
外国語学部１年：「観光学入門」	11月12日(火)	外国語学部１年生	NPO法人wiz担当者が授業の一部で同社の主催する実践型インターンシップについてチラシを配布し説明周知した。また、地域課題解決ワークショップを行い、地方創生について理解を深めた。
外国語学部２年・３年：「観光地理学」	11月15日(金)	外国語学部２・３年生	

COC+ 実績報告⑦ 令和元年度 杏林CCRC拠点推進委員会開催記録

開催場所（杏林大学 三鷹キャンパス本部棟６階）

日 程	議　　題
第１回 ４月15日(月)	〈報 告〉 １．COC＋平成31年度交付内定について ２．COC＋平成30年度実績報告書の提出について（報告書４/８、決算書４/17） ３．COC＋出張報告について ４．COC＋「いわて創造人材教育プログラム」について ５．COC＋平成31年春季IWATE実践型インターンシップ参加について ６．杏林大学COC事業最終報告書（平成25年度～平成29年度）について ７．平成31年度公開講演会について ８．杏林CCRC指定研究、地域活動助成費【研究】の選考について 〈協 議〉 １．平成31年度杏林CCRC拠点推進委員会開催日程（案）について ２．いわて高等教育コンソーシアムについて http://www.ihatov-u.jp/gaiyou/index.html
第２回 ６月17日(月)	〈報 告〉 １．公開講演会について ５/11(土) 言葉のはたらき　外）金田一秀穂先生　215名 ５/18(土) 杏林医学会主催「中高年の排尿トラブルを解消します」 医）桶川隆嗣先生他　245名 ５/25(土) 認知症のことを知ろう　医）神﨑恒一先生　228名 ６/５(水) 衰退観光地からの脱却 外部講師）舩木上次氏（萌木の村(株)代表取締役）　58名 ６/８(土) 高齢者も楽しめるボッチャーパラリンピック公式競技 保）一場友実先生　22名 ２．令和元年度予算について ３．杏林CCRC指定研究、地域活動助成費【研究】の採択について ４．COC＋出張報告について ５．COC＋平成31年夏季IWATE実践型インターンシップについて ６．COC＋岩手県内事業所バスツアーについて ７．COC＋岩手大学教養教育科目「地域課題演習H」「地域課題演習A」について ８．COC＋「ふるさと発見！大交流会 in IWATE 2019」について(11/23) ９．保健学部理学療法学科見学実習（岩手県内施設訪問）について（８/27～28） 〈協 議〉 １．令和２年度、令和３年度以降の「地域と大学」について
第３回 10月21日(月)	〈報 告〉 １．公開講演会について ６/22(土) 高齢者の腰痛－坐骨神経痛、腰曲がり 医）細金直文先生　225名 ６/26(水) 東京の水源地・丹波山村で今起きているコト 温もりのある街をつくる 外部講師）小林幸司氏（NPO法人小さな村総合研究所）他　53名 ７/６(土) がんから身を守るために　医）阿部展次先生他　237名 ７/13(土) 人生100年時代のキャリアを考える キャリアサポート）米津哲也副部長　85名 ７/20(土) 翻訳者が教える英語攻略法－あなたは本当に英語が 読めていますか？　外）関　美和先生　85名 ８/31(土) 龍馬の夢を挫いた男～勝海舟に届いた手紙 総）松田和晃先生　74名 ９/21(土) 米中貿易戦争から「新しい冷戦」へ？ 総）島村直幸先生　69名 ９/28(土) 最新の褥瘡予防と治療　床ずれ、褥瘡を在宅で 作らないために　医）大浦紀彦先生54名 ２．令和元年度予算について ３．平成30年度杏林CCRC指定研究、地域活動助成費【研究】の事後評価について ４．「そなえるドリルから地域防災を考えよう！」の開催について ５．COC＋令和元年度大学改革推進等補助金交付決定通知について ６．COC＋出張報告について ７．COC＋保健学部理学療法学科見学実習（岩手県内施設訪問）について（８/27～28） ８．COC＋ジョブカフェいわて-インターンシップ参加報告について ９．COC＋岩手県出身学生の在籍状況について 〈協 議〉 １．第８回杏林CCRCフォーラムについて ２．令和２年度地域活動助成費【研究】の募集案内について
第４回 12月16日(月)	〈報 告〉 １．公開講演会について 10/26(土) 黎明期　日墺関係の周辺－西園寺公望と室孝次郎 総）松田和晃先生、進邦徹夫先生、木暮健太郎先生、 半田英俊先生　23名 11/２(土) 高齢者のがん治療　医）長島文夫先生　120名 11/２(土) 私の人生予定表－満足のいく最期を描くアドバンス ケア プランニング　保）角田ますみ先生　137名 11/16(土) 杏林医学会講演会「タバコの健康障害、肺の病気を考える」 医）石井晴之先生他　57名 12/７(土) 禁煙して健康寿命をのばそう！　医）滝澤　始先生　９名 ２．COC＋「ふるさと発見！大交流会 in IWATE 2019」参加報告について ３．COC＋令和２年春季IWATE実践型インターンシップについて ４．ポストCOC＋の検討について 〈協 議〉 １．人事関係について
第５回 令和２年 ２月17日(月)	〈報 告〉 １．公開講演会について 12/21(土) 令和２年オリンピック前後のホテル産業 外）西山桂子先生　19名 １/11(土) これも薬疹？－様々な薬疹の臨床から－ 医）水川良子先生　90名 １/18(土) からだを支える「口腔ケア」　保）寺島涼子先生　81名 １/25(土) トランプ大統領の再選戦略　総）島村直幸先生　115名 １/30(木) よくわかる、知って得する！「糖尿病のはなし」 ～糖尿病を知って、生活習慣病を予防しよう！～ 医）安田和基先生　54名 ２/４(火) 発達障害に関する啓発講演会：発達障害に関して、子どもや 保護者に対する具体的な対応方法や地域での支援の仕方について 病）石井 翼 言語聴覚士　48名 ２．予算執行状況について ３．第８回杏林CCRCフォーラムについて ４．COC＋フォーラム「岩手の未来を切り拓く ～ふるさといわて創造プロジェクトが取り組んできたもの～」 ５．COC＋外国語学部科目フィールドスタディⅣ（釜石）について ６．課題解決型授業の普及に向けた情報交換会 －課題解決プログラム事例紹介－について ７．地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）運用規程について ８．「ふるさといわて創造人材」認定について ９．来年度「ふるさといわて創造人材教育プログラム」について 10．ポストCOC＋の検討について 11．COC＋事後評価について 〈協 議〉 １．人事関係について